
英雄伝説～光と闇の軌跡～番外編 アリサのお見合い篇

sorano

暁～小説投稿サイト～ By 肥前のポチ

<http://www.akatsuki-novels.com/>

注意事項

このPDFファイルは「暁く小説投稿サイトく」で掲載中の小説を「暁く小説投稿サイトく」のシステムが自動的にPDF化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「暁く小説投稿サイトく」を運営する肥前のポチに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

英雄伝説く光と闇の軌跡く番外編 アリサのお見合い篇

【作者名】

s o r a n o

【あらすじ】

光と闇の軌跡の後日談の一つ、"アリサのお見合い篇"です

第1話

「ゼムリアの敵クロイス家の騒乱」から半年後、士官学院を通っていたアリサはある日母親であるイリーナ会長に呼ばれて実家に戻り、とある話を聞かされた。

～夜・ルーレ・ラインフォルト本社ビル・24F～

「私に縁談！？どういう事よ、母様！！」

母親であるイリーナ会長から話を聞き終えたアリサは信じられない表情で大声で叫んだ。

「……シャロン、詳しい経緯をアリサに説明してあげて。」

「かしこまりました、会長。」

イリーナ会長に促されたシャロンは会釈し

「シャロン！？まさか貴女も知っていたの！？」

シャロンの様子を見たアリサは信じられない表情をした。

「はい。……ちなみにこの縁談は1ヵ月前から会長が相手方と何度も交渉し、ようやく応じてもらえたのです。」

「なっ！？そんなに前から！？どうして縁談に臨む本人である私には何も知らせなかったのよ！？」

シャロンの説明を聞いたアリサは驚いた後怒りの表情で2人を睨んだ。

「事はラインフォルトグループの未来に関する事だから、貴女には教えないように命じていたのよ。下手に貴女の口から第3者に知れ渡って、ラインフォルトグループのライバル社にこの縁談を邪魔される訳にはいかないしね。」

「ラインフォルトグループの未来って……一体どういう事よ。」

イリーナ会長の説明を聞いたアリサは呆けた後二人を見つめて尋ねた。

「……とりあえずまずこれを見てみなさい。」

その時イリーナ会長がアリサに書類を差し出した。

「？……………なっ！？か、母様！？これは一体どういう事……………！？あのクロスベルで起こった「大樹」の事件以降からグループ全体が大赤字だらけじゃない……………！」

書類の内容――ラインフォルトグループの経営状況の内容を読んだアリサは驚いた後信じられない表情でイリーナ会長を見つめて尋ね

「……「ラインフォルトグループ」は「貴族派」と「革命派」、それぞれに加担して元エレボニア帝国で内戦を激化させたせいで、ラインフォルトグループはクロスベルとメンフィルの両皇家からは一切信用がなく、エレボニア帝国滅亡後兵器開発工場は返されたけどラインフォルトグループによる兵器並びに武器の開発及び販売は現在禁じられているのよ。」

「―――現在は車両や鉄鋼品に生活用品、今までの利益によって得たラインフォルトグループの経営金で賄っている状況ですが……それも長続きせず、早ければ5ヵ月以内には倒産する見通しです。」

「そ、そんな！？で、でも……鉄鋼品や生活用品は売れているんですよ？これからはそちらの方向性を重視すればいいんじゃないの？」

二人の説明を聞いたアリサは表情を青褪めさせた後不安そうな表情で尋ねた。

「無理ね。ラインフォルトグループの強みは何といっても武器や兵器の販売だし、以前と違って「ザクセン鉄鉱山」の資源はかなりのコストがかかるし、生活用品等の製品に関しても『インフィニティ』

が出す製品の方がよっぽど性能が上だから、ラインフォルトグループが販売している製品では勝てないわ。」

「『インフィニティ』？……一体どこの会社なのかしら。」

イリーナ会長の説明を聞いたアリサは不思議そうな表情で尋ねた。

「『インフィニティ』……かのユイドラ領主「匠王」のご息女である姉妹の方々が立ち上げた新たな会社です。確かお嬢様はその会社を立ち上げた姉妹の方々と面識があるはずですが………」

「え……まさかセティ達の事！？」

シャロンの話を聞いたアリサは呆けた後信じられない表情で尋ねた。

「『何でも創る』を謳い文句にしている『インフィニティ』……—まさにその謳い文句通り、「工匠」である彼女達は社員達に自分達の技術を教えながらどのような商品でも創っているのよ。」

「『インフィニティ』が販売している製品はどれも性能が我が社で出している製品と比べると明らかに上なのです。今は小さな会社である為、販売している製品の数は少ないですが、「工匠」の数は徐々に増えて拡大していますし、このまま大きくなればラインフォルトグループではもはや敵わない状況になるかと思われます。」

「——『インフィニティ』の強みは何といっても信頼度と会社を立ち上げた姉妹が持つコネ、後は新たに公布された「工匠」制度に

よる「工匠」達をほぼ独占状態にしている事ね。父親である「匠王」の知名度もあって、リベール、メンフィル、クロスベルの各皇家にも信頼されている上、「工匠」は今までとは違った方法で様々な製品を加工しているわ。このままだと全ての事業が『インフィニティ』に持っていかれる事になるでしょうね。そこに加えてヴェルヌやZCFの製品も加わるのだから、ラインフォルトの利益は極端に落ち込むわ。」

「……………その……………ラインフォルトグループの社員を「工匠」にはできないの？そうしたら『インフィニティ』が出している製品をラインフォルトグループでも作れるんじゃないの？」

二人の話を聞いたアリサは複雑そうな表情をした後二人を見つめて尋ねた。

「「工匠」には免許が必要でね……………免許が発行できる権利を持つのは「匠王」、「匠貴」、「匠範」、「工匠長」のランクを持つ「工匠」なのだけど……………現在そのランクの「工匠」は「匠貴」のランクを持つ『インフィニティ』の社長達……………ディオーン3姉妹と、彼女達がユイドラ領から呼び寄せた数人の「工匠」しか免許の発行ができないのよ。……………加えて「工匠」が創る製品は「工匠」のランクごとに分けられ、さらに「工匠」のみしか創ってはいけない制度になっているのよ。」

「「工匠」の免許は「工匠」の免許を発行できる方達の講習を受け、試験を受けて合格すれば発行される法律になっておりまして。無論、社員達に講習を申し込ませたのですがなにぶん希望者が殺到してい

る状況でして……講師の資格を持つ「工匠」の数ではとても足りなく、現在は予約待ちの状況でございまして、早期に「工匠」の免許を取る事は現状不可能なのです。」

「……………」ラインフォルトグループ」の社員達を優先的に講習を受けさせる事はできなかったの？ラインフォルトグループとの提携とかを条件にしてとか。」

イリーナ会長とシャロンの説明を聞いたアリサは考え込んだ後尋ね「勿論、彼女達に直接会って交渉したわ。でも彼女達からは講習を受けさせる人達は平等にする方針だからって言う理由で断られたのよ。」

「ちなみに平等にする理由は貧困に苦しむ人々が手に職を持って生活できるようにする為……との事です。なお、こちらの調査によるとヴェルヌやZCF、エプスタインにも同じような取引きを申し込まれ、我々の時と同じ解答をされたようです。」

「……………」

二人の答えを聞いたアリサは複雑そうな表情で黙り込み

「……………」それで？私が縁談に臨んで、その相手と結婚できたらラインフォルトグループが何故立ち直れるのよ。」

すぐに気を取り直して真剣な表情で尋ねた。

「相手方の家はメンフィル皇家やこのルーレの領主の一人――エイフェリア様から信頼されておりまして……アリサお嬢様のご結婚と引き換えに、ラインフォルトグループによる兵器並びに武器の開発及び販売の再許可に加えてザクセン鉄鉱山の資源のコストの削減、更にはその場にいたクロスベル帝国の兵器開発並びに技術開発部を担当しているエイフェリア様がラインフォルトグループとの協力体制を約束して下さいだったので。」

「……つまりは政略結婚って訳ね。」

シャロンの説明を聞いたアリサは顔に青筋を立て

「ちなみに相手方には既に両親公認の婚約者がいるわよ。」

「ハアッ！？じゃあ、何！？私に妾になれって言うの！？」

イリーナ会長の話を聞いて机を叩いて立ち上がって激怒した。

「……嫌ならこの話を受けなくていいわ。ただしラインフォルトグループ……いえ、今日限りでこの家と縁を切ってもらうわよ。……学院卒業までの学費は既に払ってあるから卒業後は自分の力だけで生きていきなさい。……私は最後まで足掻いてみるわ。調査によれば向こうとしても各地に多くの就業者を抱えるラインフォルトグループの倒産は望んでいないみたいだから、他にも方法は必ずあ

るわ。」

「会長………お嬢様、この縁談にはラインフォルトグループに務める多くの社員達の未来がかかっているのです………お見合いをして頂くだけでも二大国側に対して信頼できる"証"を示した事にもなりますので、どうかお願いします………」

静かな表情で答えたイリーナ会長の話を聞いたシャロンは心配そうな表情をした後、アリサを見つめて頭を深く下げた。

「……………」

二人の話を聞いたアリサは複雑そうな表情で自分と親しくしてくれたラインフォルトグループに務める多くの知り合い達の顔を思い出

し
「……………それで？肝心の相手は誰よ。」

目を伏せて考え込んだ後、目を見開いて二人を見つめて言った。

「ありがとうございます………！お優しいアリサお嬢様の事ですから、きっと受けてくれると思っていました………！」

「まだ受けるとは言っていないわよ！？早とちりするんじゃないわよ、シャロン！もし、相手の男性の年が滅茶苦茶離れていたら絶対嫌だからね！」

そして明るい表情で頭を下げたシャロンを見たアリサは慌てた様子で声を上げた。

「――その点は安心しなさい。見合い相手の年齢は貴女と同一年よ。」

「お見合いのお相手はエイフェリア様と共にこのルーレを納める立場であられるシュバルツァー伯爵のご子息でございます。」

「へ……シュ、"シュバルツァー"……？（あ、あれ……？最近どこかでその名前を聞いた事があるような……？）」

二人の話を聞いたアリサは呆けた後首を傾げて考え込んだ。

「――こちらの写真に写っている殿方がそのお相手になります。」

その時シャロンが見合い相手の写真を机に置いた。

「え………う、嘘！？この人ってリインじゃない！？という事は見合い相手の婚約者ってまさか………リインの義妹のエリゼさんの事！？」

写真に写っている人物――リインを見たアリサは驚き

「あら………二人とも面識があるのかしら？」

「フフ、確か「ゼムリアの敵クロイス家の騒乱」事件解決の際に共に肩を並べて戦い、危ない所をリン様にかばわれた事があると、以前私に話をしてくれましたよね？」

アリサの反応を見たイリーナ会長は目を丸くし、シャロンは微笑みながら尋ねた。

「う……………」

シャロンに尋ねられたアリサは呻いた後顔を真っ赤にしてリンの写真を見つめ

「（そ、そう言えば私、2回も助けられてお礼もまだ言ってなかったわよね…………？）……………わかったわよ。とりあえず会うだけだからね……………」

リンの写真を見つめて考え込んでいたアリサは溜息を吐いて答えた。

「そう。……………相手と会う時間と場所は明後日の12：00にミシュラムのレストラン「フォルトウナ」よ。明日の夕方にはここを起ってクロスベルのホテルに宿泊する予定だから、それまでに準備をしておきなさい。」

アリサの答えを聞いたイリーナ会長は頷いた後説明し

「ウッフ……………出発する時刻ギリギリまでリン様を悩殺できるドレスや下着選びをお手伝いしますわ。ううっ……………ついにお嬢様が大人の女性になる日が来たのですね……………」

「そんな事する必要ないわよ！？というか気が早すぎよ、シャロン！」

微笑みながら言った後嘘泣きをしている様子のシャロンを見たアリスは顔を真っ赤にして怒鳴った……………

第2話

～同時刻・ルーレ・シュバルツァー伯爵邸～

「へっ！？お、俺に縁談！？」

「（兄様に縁談！？まさかこれって未来のキーアさんが言っていた……！）どういう事ですか、お父様、お母様！私と兄様が恋仲の関係で、将来夫婦になる事はお二人ともお認めになられたでしょう！？」

同じ頃父であるシュバルツァー伯爵から縁談の話を聞かされたリィンは驚き、エリゼは血相を変えた後机を叩いて立ち上がって怒りの表情で声を上げ

「エリゼ、貴女の気持ちはよくわかっているから少しは落ち着きなさい。私達は貴女達の仲を引き裂くつもりなんて一切ないわ。」

「……………わかりました。」

そして母親であるルシア夫人に宥められたエリゼは不満げな様子を隠しながら椅子に座り直した。

「「ラインフォルトグループ」は知っているか、リィン。」

「へ？あ、ああ、それは勿論。"碧の大樹"での戦いの時に援軍として来たⅦ組のメンバーの一人――アリサだったか。確か彼女がそのラインフォルトグループの会長の娘で、共に戦った事はあるけど……………」

「知っているのならば話は早い。そのアリサさんが今回の縁談相手だ。」

「！！（やっぱり……………！）」

「へっ！？な、なんで彼女が……………？というか向こうも俺とエリゼの関係は知っているはずだけど……………」

シュバルツァー伯爵の話聞いたエリゼは目を見開き、リィンは呆けた声を出した後戸惑いの表情を見せた。

「実は……………」

そしてシュバルツァー伯爵は二人にラインフォルトグループが縁談を申し込んできた理由を説明した。

「……………あのラインフォルトグループがそこまで追い込まれている状況だなんて……………」

説明を聞き終えたリィンは驚き

「……………内戦の件やかつてクロスベルを脅かしていた"列車砲"を

エレボニア帝国軍に提供した件もある上、そこに追い討ちをかけるかのように新しくできた制度――「工匠」の制度によってゼムリア大陸に進出し始めている「工匠」が作る製品で利益が更に減少している状況なのですから、仕方ありません。…………お父様。一つお聞きしたい事があるのですが。」

エリゼは静かな表情で答えた後シュバルツァー伯爵を見つめた。

「何だね？」

「……何故、今回の縁談を受け入れたのですか？政略結婚である事にはある程度納得できます。重婚の件だって、珍しい事です。が今の時代一般の方々にも受け入れられている事なので私がアリサさんの事を2人目の妻として認めれば構いません。ですが倒産の危機に陥っているラインフォルトグループの為に何故今回の縁談を受け入れたのでしょうか？話を聞く限り、ラインフォルトグループ側にしか得がないようにしか思えないのですが……………」

「確かに言われてみればそうだな……………」

エリゼの疑問を聞いたリインは頷いた後考え込んだ。

「…………ラインフォルトグループが倒産してしまえば多くの失業者が各地で出てしまい、このルーレを含めた各地での税の収入が大幅に下がる恐れや多くの民達が貧困に苦しむ恐れが出てくる話は随分

前から両帝国で挙がっていたんだ。かと言って、ラインフォルトグループの動きを制限しているメンフィル、クロスベルの両帝国は内戦に加担したラインフォルトグループをそう簡単には信じられない……なので自分達が信用できる「証」が欲しい。」

「そこに向こうから申し込んできた縁談話が渡りに舟……となった訳ですか。」

「つまりアリサは人質のような役割か……………」

シュバルツァー伯爵の説明を聞いたエリゼとリンはそれぞれ複雑そうな表情をしていた。

「二人の今後を考えるとできれば受けたくなかったのだけど、色々と協議した結果エイフェリア様を始めとしたクロスベル帝国側はその件で納得したし、メンフィル帝国側からも縁談を受けるように命令が来ているのよ。それも皇族の方から直々に。」

「リウイ陛下…………いや、シルヴァン陛下達から直々に…………？」

ルシア夫人の話聞いたリンは不思議そうな表情をし

「いや、リフィア殿下だ。」

「へっ!？」

「リフィアが!？」

シュバルツァー伯爵の答えを聞いた二人は驚いた。

「……むしろ私はエリゼが知らない事の方が少々驚いたのだが。常に傍で仕えて、友人同士として親しい間柄なのだろう？ 殿下から既に話は聞いていると思っていたのだが……」

「今日の話で初めて知りました！（あの娘ったら……！さてはいつも私に怒られている意趣返しに私を驚かせる為にわざと黙っていたのね……！帰ったら覚えていなさい……！）」

シュバルツァー伯爵に尋ねられたエリゼは内心リフィアに怒りを覚えながら怒りの表情で答えた。

「それでどうするのかしら、リン？ リフィア殿下からはどうしても嫌なら断っても構わないと伝えられてはいるけど……」

「……いや、受けるよ。多くの民達の生活がかかっている上、少なくともお見合いをしただけでもラインフォルトグループ側も二大国に対して信用できる「証」を見せた事にはなと思うし、何よりリフィア殿下直々の命令を断る訳にはいかない。」

ルシア夫人に尋ねられたリンは考え込んだ後答え

「エリゼも不満とは思いますが、納得してくれないか？」

「……………わかりました。多くの民達の生活がかかっている上、祖国メンフィルの皇族であり、シュバルツァー家に目をかけて下さっているリフィア殿下直々からも命令が来ているのですから、シュバルツァー家の一員として納得します。」

シュバルツァー伯爵に尋ねられたエリゼは不満そうな様子を隠さない表情で答えた。

「エリゼ……心配しなくても、俺はずっとお前と一緒にだ。」

エリゼの様子を見たリンは優しくな微笑みを浮かべてエリゼの頭を撫で

「に、兄様……………いい加減に妹扱いは止めて下さい。私達はどう兄妹の関係ではなく、将来夫婦になる関係なのですから。」

頭を撫でられたエリゼは若干頬を赤らめて恥ずかしそうな表情でリンを見つめ

「でも、頭を撫でなかった時は『薄情です』って言うじゃないか。一体俺はどうすればいいんだ？」

「知りません。ご自分の胸にお聞きになってください。」

戸惑いの表情を見せて言ったリンの言葉を聞いたエリゼはわずかに怒気を纏いながら目を伏せて静かな口調で答え

「??？」

エリゼの反応を見たリンは首を傾げた。

「クスクス……………」

「やれやれ……………婚約者ができても鈍感な所は全く治っていないよ
うだな……………」

二人の様子を見ていたルシア夫人は微笑み、シュバルツァー伯爵は
呆れた様子で溜息を吐いた。

そしてお見合いの当日……………

第3話

お見合いの当日、シュバルツァー家とラインフォルト家は保養地ミシュラムのレストランでお見合いを始めようとしていた。

「ミシュラム・レストラン」フォルトウナ」

「ね、ねえシャロン。本当におかしな所はないわよね？」

胸元を開いたパーティー用の漆黒のワンピースを身に纏い、漆黒のウェディンググローブを身につけ、ストレートに流している髪の状態で、レストランの椅子に座っているアリサは不安そうな表情で自分達の背後に控えているシャロンに尋ね

「うふふ、よくお似合いですわ。」

「で、でも……私の年齢ではまだ早い服装だと思うし……それが原因で向こうがひいたりしないかしら？」

微笑みながら答えたシャロンの言葉を聞いたアリサは不安そうな表情をし

「あら、その様子だとお見合い相手に対して結構気がある様子ね。
……まあ、私としたらそちらの方が都合がいいのだけれど。」

「ち、違うわよ！相手が知り合いだから、ひかれるのが嫌なだけよ！」

イリーナ会長に言われたアリサは真っ赤にした顔で慌てた様子で答えた。

「会長、お嬢様。」

するとその時レストランに入り、ウェイターに案内される様子のリン達の姿に気付いたシャロンは二人に声をかけ、声をかけられた二人は姿勢を正して自分達に近づいて来るリン達を見つめていた。

（うっ……………）

アリサは儀礼用の漆黒の軍服を身に纏ったリンの隣で歩いている儀礼用の侍女長服を身に纏い、全身から目にも見えるほどの怒気のオーラを纏っている様子のエリゼを見て冷や汗をかき

（アハハ……………リンと正式な婚約を交わしているエリゼさんにとったら私は突然沸いた泥棒猫も同然の存在だから仕方ないわよね………結婚したらエリゼさんとは仲良くしたいんだけどなあ……………って、何を考えているのよ！？）

心の中で苦笑した後、自分に突っ込んだ。

「お待たせして申し訳ありません、イリーナ会長。」

「いえ、こちらも先程到着したばかりですのでお気になさらずに。」

シュバルツァー伯爵の言葉を聞いたイリーナ会長は静かな表情で答えた。そしてシュバルツァー伯爵やリィン達は椅子に座ってアリサ達と対面した。

「シャロン。」

「はい、会長。」

イリーナ会長に視線を向けられたシャロンは会釈をした後、ウェイターを小声で呼び止めて料理を持ってくるように指示をし

「……………お互いに初対面の方達もいらっしゃるので料理が来るまでに自己紹介をいたしましょう。——ラインフォルトグループ会長、イリーナ・ラインフォルトと申します。こちらのメイドはシャロン。私達ラインフォルト家のメイドと私の秘書を務めています。」

「シャロン・クルーガーと申します。どうぞお見知り置きを。」

イリーナ会長に紹介されたシャロンは会釈をし

「これはご丁寧に。では私達の方からも。シュバルツァー家当主、

テオ・シュバルツァーです。以後お見知り置きを。」

「テオ・シュバルツァーの妻のルシアと申します。」

「…………テオ・シュバルツァーとルシア・シュバルツァーの娘で、
リン・シュバルツァーの婚約者」のエリゼ・シュバルツァーと申
します。以後「お見知り置きを」。

両親に続くようにエリゼはジト目でアリサを見つめながらリンの
婚約者である事の部分を強調しながら自己紹介をした。

「ラインフォルトグループ会長イリーナ・ラインフォルトの娘のア
リサと申します。…………え、えっと…………今回は色々とごめんなさい、
エリゼさん。」

エリゼにジト目で見つめられたアリサは冷や汗をかきながら自己紹
介をした後、エリゼを見つめて言い

「…………いえ。今回のお見合いには色々複雑な事情が絡んでいる
事は理解していますので、お気になさらずに。」

見つめられたエリゼは静かな表情で答えた。

「え、えっと…………シュバルツァー伯爵の息子、リン・シュバル
ツァーと申します。お初にお目にかかります、イリーナ会長。」

一方その様子を大量の冷や汗をかきながら見守っていたリンはイ

リーナ会長を見つめて自己紹介し

「フフ、そんなに固くならなくてもいいわよ。今回のお見合いはこちらの強い希望を聞いてもらって実現できたのだから。」

「お気遣いありがとうございます。それと……………ひ、久しぶりだな、アリサ。」

苦笑しながら言ったリーナ会長の言葉を聞いたリィンは会釈をした後、大量の冷や汗をかきながらアリサを見つめ

「そ、そうね…………あの『碧の大樹』で初めて出会った時、後でこんな状況になるとは思わなかったけど……………」

見つめられたアリサも大量の冷や汗をかきながら答えた。

「…………そう仰っている割には今回のお見合いにかなり気合いを入れているご様子ですね。とても『家の都合』の為に御見合いに臨んでいる様子には見えない所か、むしろ本気で兄様を誘惑する為に着飾っているのでしょうか。あくまで私の予想になりますが今のアリサさんの姿を見たら、多くの独身の殿方が求愛してくるのではないですか？」

二人の会話を聞いていたエリゼはアリサの服装や髪型を軽く確認した後ジト目でアリサの顔を見つめながら呟き

「う……………」

「エ、エリゼ……………」

遠回しな言い方で自分を攻撃して来るエリゼの言葉を聞いたアリサは表情を引き攣らせ、リィンは冷や汗をかきながらエリゼに視線を向け

「うふふ、皇族専属侍女長を務めておられるエリゼお嬢様にそのような誉め言葉を頂けるなんて光栄です。出発までの間の時間——約半日も賭けて厳選した甲斐がありましたわ。」

「シャ、シャロン。」

「……………」半日も賭けて、ですか。」

上品に微笑みながら言ったシャロンの説明を聞いたアリサは冷や汗をかき、エリゼは静かな口調で呟いた後全身に纏っている怒気のオ——ラを更に強めてジト目でアリサを見つめ続け

（お願いだから火に油を注がないでよ、シャロン——！被害を受けるのは私なのよ！？というか貴女、絶対こうなるとわかっていてわざと言っているでしょう！？）

（どこを探しても婚約者の目の前でするお見合いなんて絶対にならないぞ……………）

エリゼに見つめ続けられたアリサは大量の冷や汗をかきながら表情を引き攣らせて心の中でシャロンに突込み、リィンは疲れた表情になった。

「え、えっと……そ、そう言えば二人とも以前出会った時と服装が違うわよね？親衛隊員や皇族専属侍女長の服装でもお見合いで十分通用する服装だと思うのだけれど……」

そして話を変えるかのようにアリサは冷や汗をかいて若干焦った様子でリィンとエリゼを見つめて尋ね

「ハハ……ま、まあお見合いなんだからそのまま戦場に出る軍服姿だと相手に対して失礼だからな。」

「お相手はあのラインフォルトグループを率いる立場の一族の方達なので、こちらとしても失礼をする訳には参りません。」

尋ねられたリィンは苦笑しながら答え、エリゼは静かな表情で答えた。その後料理が運ばれ、両家は料理を口にしながら会話を交わしていたが、リィンとアリサは互いに気まずい雰囲気を纏わしながら会話を交わしていた。

「さてと……後は本人達に任せて私達はそろそろ失礼しましょうか。」

そして食事を終えて、ある程度の時間が経つとシュバルツァー伯爵が提案し

「そうですね。……シャロン、行くわよ。」

提案に頷いたイリーナ会長はシャロンに視線を向けた。

「かしこまりました、会長。……それでは私達はこれで失礼しますので頑張ってお返しね、アリサお嬢様。ちなみにこの後の会長は予定が入っております……ホテルの部屋で待っているのは私だけになります。ですので朝帰りをされましてもシャロンは決して誰にも言いませんわ♪……あ、何でしたらお二人で甘い夜を過ごしたい時に連絡して下さったらいつでもこのシャロンが部屋を手配しますし、シュバルツァー伯爵家の方達の方にも説明しておきますわよ？」

「ええッ!？」

「シャロン!!」

からかいの表情で言ったシャロンの言葉を聞いたリィンは驚き、アリサは真っ赤にした顔で怒鳴り

「に・い・さ・まゝ?」

「な、何でそこで俺を見るんだよ、エリゼ!？」

膨大な威圧に加え、さらに背後には魔力によって発生した電撃がバチバチと迸るほどの魔力を全身に纏って極上の微笑みを浮かべるエリゼに見つめられたリィンは大量の冷や汗をかきながら慌てて尋ねたが

「ギロツ。」

「う……………」

絶対零度の目をしたエリゼに睨まれ、黙り込んだ。

「もう、この娘ったら……………私達も行くわよ、エリゼ。」

「……………はい。————それでは失礼します。お二人ともどうぞ“ごゆっくり”。」

そして呆れたルシア夫人に促されたエリゼは魔力や威圧を引っ込めて頷いた後ジト目で2人を見つめて会釈をし、シュバルツァー伯爵達と共にその場から去って行った。

「……………」

シュバルツァー伯爵達が去ると二人は黙り込んだ。

「そ、その……………本当にごめんね……………？家の事情で貴方達を巻き込ん

でしまっ……そのせいでエリゼさん、かなり怒っているようだし……」

やがてアリサは申し訳なさそうな表情で口を開いてリィンを見つめ

「いや……気にしないでくれ。断る事はできたのに、実際に見合いをする事を決めたのは俺だし。」

リィンは首を横に振って答えた。

「そ、そう……でもどうして……？ 婚約しているエリゼさんがいるのに……」

「そちもある程度予想できていると思うけど、今回の見合いをしただけでも、ラインフォルトグループ側も二大国に対して信用できる「証」を示した事になるし、リフィア殿下からも命令があったからな。」

「そう……（って、何で残念がっているのよ！？）」

リィンの答えを聞いたアリサは心の中で自分に突っ込みながら肩を落とし

「……俺の方からも聞きたいけど……何で今回の見合いを受けたんだ？ 俺にエリゼがいる事も知っているのに。」

アリサの様子を見たリィンは首を傾げた後気を取り直してアリサを

見つめて尋ねた。

「その……やっぱりラインフォルトグループの為……ね。知り合いやそのご家族の方達が実家のせいで路頭に迷うなんてこと、見逃せないわ。」

「へ……やっぱりラインフォルトグループのお嬢様だから、ラインフォルトグループの社員の知り合いが多いのか？」

「……ええ。みんな、私が母様の娘だからと言って距離を取らず優しく接してくれたし、色々な事を教えてくれたわ。………それは決して母様に対して媚を売る為じゃないってわかっているわ。………」

リンに尋ねられたアリサは静かな表情で答えた後黙り込んだ。

「………その、一端外に出ないか？ここだと話にくい事があるかもしれないし………」

「………そうね。」

そして二人はレストランから出て、別荘街を歩いて、湖の傍にあるベンチに座った………

第4話

くミシユラムく

「いい風……大国となったクロスベルの保養地としてまさにピッタリな場所よね……女神様達とビーチやテーマパークで一緒に楽しんだ2日間が懐かしいわね……」

ベンチに座っているアリサは遠い目をして湖を見つめ

「ハハ……まだあの時からそんなに経っていないだろう？」

アリサの言葉を聞いたリィンは苦笑しながら答えた。

「……そうね。でも世界の情勢は大きく変わってしまったわ。」

「……………」

静かな表情で呟いたアリサの言葉を聞いたリィンは複雑そうな表情で黙り込んだ。

「あ、リィンが気にする必要はないわよ？クロスベルとメンフィルがエレボニア帝国を滅亡させた結果内戦は治まって、市民達は平和な生活に戻れた上、貴族による圧政がなくなったから住みやすい世

の中になっているし。セドリック殿下達には申し訳ないけれど……私を含めたエレボニアの民達は今の生活に満足しているわ。」

「…………でも、ラインフォルトグループは追い詰められる立場になっているだろう？」

「それこそ自業自得よ。内戦に加担した上クロスベルの民達を脅かす兵器——"列車砲"を造ってエレボニア軍に提供したのだから、当然の結果だわ。…………だから、私が責任を取ってラインフォルトグループの為に働く社員達の未来を守らなければならないわ。ラインフォルトグループ会長の娘として。」

リンに言われたアリサは苦笑しながら答えた後決意の表情になった。

「…………少し話していて疑問に思ったけど…………何でアリサはトルズ士官学院に入学したんだ？」

「え……………」

「士官学院は元々軍人を輩出する学院だ。そりゃ軍人以外の道に向かう人達もいるだろうけど、少なくともラインフォルトグループほどの大企業の会長の娘が士官学院に入る意味がない気がするんだ。企業側なのだから戦いとは無縁だし。」

「……………」

リンの言葉を聞いたアリサは複雑そうな表情で黙り込んでいた。

「ご、ごめん。何かかなり突っ込んだ事を聞いてしまったか？」

アリサの様子に気付いたリンは若干慌てた様子で答え

「ううん、別に気にしていないわ……………」

アリサは首を横に振って答えた後黙り込み

「……………9年前だったわ。技術者だった父が亡くなったのは。」

「……………」

やがて口を開き、アリサの言葉を聞いたリンは呆けた。

「父が亡くなった事をきっかけに、私の家は大きく変わってしまった。当時、取締役だった母は事業拡大に没頭するようになって……………家族〃を殆んど顧みなくなったわ。」

「そんな事情が……………確かに、イリーナ会長は随分やり手というか凄腕といった女性に見えたけど。」

「実際は、今日会った印象の数倍くらいは強烈でしょうね。一緒に食事できる機会すら3ヵ月に1度あるかどうか……………代わりに一緒

にいてくれたのがお祖父様と、シャロンだったの。」

「そうか……あれ？今日の見合いではお祖父さんの姿は見かけなかったけど……」

「お祖父様はノルド高原で余生を過ごしているわ。」

「へー………ちなみに今日アリサ達の傍に控えていたメイドの人……シャロンさんとの付き合いも結構長いんだよな？随分親しげに接していたし。」

アリサの説明を聞いたリインは目を丸くした後アリサとシャロンのやり取りを思い出して尋ねた。

「ラインフォルト家に来てから8年くらいになるわね。……家が家だから、子供時代、本当の意味での友達は少なかった。貴族の子からは疎まれ、平民の子からは特別扱いされ……でも、二人がいてくれたから少なくとも寂しくなかったわ。お祖父様は、乗馬やバイオリンなど色々な趣味の手ほどきをしてくれたし……シャロンから護身術や弓の扱い、貴族の子女並みの礼儀作法を教わった。……いっぽう母は……会長である祖父の意向を無視して際限なくグループを拡大していった。」

「そうだったのか……でも、元々かなり大きな技術工房ではあったんだろう？」

「ええ、鉄鋼や鉄道から戦車や銃のような兵器まで……」死の商

人"と揶揄されるだけのモノ作りはしてきたと言えるわね。そのこと自体、複雑ではあるけど"恥"と思ったことは一度もないわ。でも――ここ数年、ウチが作ってきたものを考えると、さすがに行き過ぎとしか思えない。」

「ここ数年作ってきたもの……？」

複雑そうな表情で話をしたアリサの話聞いたリインは首を傾げた。

「クロスベルにしばらく滞在していたのだから、知っているでしょう？先程話に出した旧エレボニア東部、ガレリア要塞に2門設置されていた"列車砲"のことは。」

「ああ……噂くらいは。何でも、世界最大の長距離導力砲だったそうだな？」

「私もスペックしか知らないけど恐ろしいほどの破壊力よ。旧カルバード共和国、メンフィル帝国と領有権争いをしていた"クロスベル自治州"の全域をカバー。たった2時間で、人口50万ものクロスベル市を壊滅できるらしいわ。」

「……とんでもないな。メンフィルやクロスベルが開発した新たな兵器もそうだけど、その"列車砲"も戦争というより、虐殺にしか結びつかないと思うんだが……」

アリサの話を聞いたリインは溜息を吐いた後複雑そうな表情をした。

「ええ、私もそう思う。そして……母が受注したその兵器の完成に立ち会った祖父も同じだった。何というバチ当たりな兵器を造ったんだろうって悩んだみたい。そして、帝国軍に2門の列車砲を引き渡すか迷っていたところで……取締役だった母の裏切りに遭った。」

「え—————」

「ラインフォルトグループの大株主全員を味方につけたのよ。ルーレの領主であったログナー侯爵から帝国軍の有力人物まで……貴族派・革新派双方の意を受けてお祖父様は退陣を余儀なくされ……母の新会長への就任が決定した。」

「……………」

悲しそうな表情で答えたアリサの話聞いたリィンは黙り込んだ。

「お祖父様は……私を残してラインフォルトを去った。味方だと思ってたシャロンも雇い主である母に従うだけだった。それが——
——6年前の出来事よ。」

「そうか……………アリサは……納得が行かなかったんだな？
お母さんのした事というより“家族”が壊れてしまったことが。」

「ええ……………そうね。実の親を陥れた母様も、それをただ受け入れたお祖父様も私は納得が行かなかった……あれだけ優しくかったシャ

ロンが何も言ってくれなかったことも。ラインフォルトグループの存在が私が思っているより遥かに巨大で……その重みの前には、家族の絆なんて意味がないなんて絶対に認めたくなかった。ミシラムでの休暇の時のリウイ陛下達を見た時の姿が私が思い浮かべていた理想の姿だったわ。"ラインフォルトグループ"とは比べものにならない遥かに重みがある"メンフィル帝国"の皇族という重みの前でもあの人達は普通の家族としてみんな、仲良くしていた。」

「……………」

「だから私は———実家を出て士官学院に入ったのかもしれない。」

「……………」

アリサの話を聞いたリィンは黙り込んだ。するとその時アリサはベッチにもたれかかり

「ふっ、でも結局全然、母と家から逃げられなくて。お祖父様はお祖父様で飄々と第二の人生を楽しんで。私一体何をやっているんだろうって一時期滅入った事もあって………ノルド高原でお祖父様と再会し、Ⅶ組のみんなとノルド高原の星空を見た時どうでもよくなって、わかった気がしたわ。どうしてお祖父様がノルド高原に移り住んだのかを。」

苦笑しながら答えた後微笑んだ。

「そっか……………———アリサは強いな……………こうして俺に色々と

話してくれたってことは……多分、前に進めるきっかけが掴めたってことだろう？」

「ふふっ……そうね。だとしたら、それはきっと士官学院に入っただからだと思う。Ⅶ組のみんなに、部活のみんな……本音で向き合える仲間と出会えたから私は強くなれた。——それはリィンも同じでしょう？」

「……ああ。」

微笑みながら言ったアリサの言葉にリィンは静かな笑みを浮かべて頷いた。

「私を強いつて言うけど……リィンの方がもっと強いじゃない。私と同じ年なのにメンフィル帝国の親衛隊員だし……剣だってあのラウラと同じかそれ以上の腕前に感じたわよ？」

「ハハ……この年で親衛隊員になれたのはクロスベルでクロイス家に対しての諜報活動を成功させた褒美のようなものだし……剣はエステルさん達の父親——」剣聖「カシウス准将に鍛えてもらったお蔭だよ。」

「でも……」騎神「だったかしら？」機甲兵「を遥かに超える存在を自由自在に動かしていたじゃない。」

「うーん……あの時は勝手に頭に入ってきて、後は普段通りの動きをイメージして動かしていただけだから……エマから聞いたからわかったけど一時期俺は「騎動者」^{ライザー}の力をその身に秘めている事から逃げていたし。」

「え………どうして……？」

リンの説明を聞いたアリサは不思議そうな表情をして尋ねた。

「………昔、幼い頃エリゼと一緒に郷^{さと}の山で遊んでいたら突如吹雪になって、魔獣が俺達を襲ってきたんだ。その際に俺はエリゼを庇って魔獣の攻撃を受け……エリゼは魔獣に襲われようとしていた。」

「え………そ、それでどうなったの？」

「………突如俺の中に眠る「獣」………この場合「騎動者」^{ライザー}と呼ぶべきだな。その「騎動者」^{ライザー}の力が目覚めて気付いたら、目の前には血塗れになって絶命した魔獣が俺の前に倒れていた。」

「………」

「その時から「騎動者」^{ライザー}の力を恐れるようになったんだ。もしその力が目覚めたら今度はエリゼや父さん達を傷つけてしまうかもしれないって。」

「そう………で、でも今は使いこなしているのでしょうか？」碧の大樹「での決戦の時も使いこなして……そのお蔭で私を助けてく

れたのだから。」

「まあな。……あ、そう言えば聞くのをすっかり忘れたけど、大丈夫か？結構強く突き飛ばしたから、痣になっていなかったか？」

アリサの話に頷いたリィンはある事に気付いて尋ねた。

「ふふっ、大丈夫よ。リィンの方こそ傷跡とか残っていないの？私の代わりに敵の攻撃をともに受けて大量の血を流していたし……」

リィンの言葉を聞いたアリサは苦笑した後心配そうな表情で尋ね

「ああ、エリゼとエマの治療のお蔭でな。それよりアリサ———女の子に傷跡を作らなくてよかったよ。女の子なんだから身体に一生ものの傷跡を作るなんて絶対に嫌だろう？」

「！！！！」

口元に笑みを浮かべて言ったリィンの言葉を聞いて顔を真っ赤にした後顔を俯かせた。

「？どうしたんだ？」

アリサの様子を見たリィンは不思議そうな表情で尋ね

「ねえ……リインって"鈍感"って誰かに言われた事があるんじゃないかしら？」

尋ねられたアリサは顔を俯かせながら尋ねた。

「へ？た、確かにエリゼがよく言っていたけど……後、ロイドと
いい勝負の存在みたいな事も言っていたな。」

尋ねられたリインは不思議そうな表情で答え

「そう……ふふっ、エリゼさんの言う通り、確かにそれは言
えてるわね。（あゝあ……参ったわね……さっき励まされた事
や私を庇った理由を聞いたせいで恋を自覚しちゃったじゃない……
……だったらいっそ、この状況を利用するのもありかもしれない
わね……）」

アリサは心の中で苦笑しながら微笑んでリインを見つめた。

「へっ！？ど、どういう事だよ？？」

アリサに見つめられたリインは驚いた後戸惑い

「そのぐらい自分で考えて。……そう言えばお礼がまだだったわよ
ね。」

「お、お礼……？一体何の事だ??」

「…………あのヴァルドって人との戦いや決戦の時に戦った巨大な"影"から私を庇ってくれた事。—————ありがとう。本当に感謝しているわ。貴方がいなければ私はきっと大怪我を負っていたわ。」

「あ……………ハハ、どういたしまして。」

アリサの感謝の言葉を言われたリィンは呆けた後すぐに気を取り直して苦笑しながら答えた。

「それでここからが本題になるんだけど……………そ、その……………リィンは私の事、どう思っているの……………?」

そしてアリサは顔を赤らめながらリィンを見つめて尋ねた。

「へ? 一体どういう意味だ?」

顔を赤らめたアリサに見つめられたリィンは不思議そうな表情をした。

「そ、その……………私の事を女性として好きか嫌いか……………うん、妻としてどうかかって意味よ……………ここまで言っても私の言いたい事がまだわからないの……………?(ううっ……………こんな超鈍感男にはここまで言わないと気付かないとしか思えないのよね……………エリィさん達、相当苦労したんでしょうね……………今ならその気持ち、わかるわ……………)」

リィンの答えを聞いたアリサは真っ赤にした顔で上目づかいでリィ

ンを見つめ

「え……………」

アリサの言葉を聞いたリインは固まって考え込み

「ええええええええええええええええええっ!？」

アリサが直接的な言い方で告白して来た事に気付いて驚きの表情で
大声を上げた!

「な、なななななな、何でだ!？俺達、そんなに話した事はな
いだろ!？」

そして我に返ったリインは混乱した様子でアリサを見つめて尋ね

「しょ、しょうがないじゃない!好きになっちゃったんだから!私
の心を無意識に奪った貴方の行動や性格のせいよ!だ、だから責任
取って私をもらってよ!」

「そ、そんな理不尽な……………」

顔を真っ赤にして慌てた様子で答えたアリサの説明を聞いたリイン
は疲れた表情で呟いた後困った表情で黙り込み

「そ、そのな、アリサ。アリサの気持ちは嬉しいが俺には――」

気を取り直して申し訳なさそうな表情で答えかけたが

「先に言っておくけどエリゼさんがいるから駄目っていう理由は無
しよ。元々このお見合いは重婚を前提としたお見合いなんだから。
もし貴方が少しでも私の事を想ってくれるのなら、私は重婚を受け
入れるし、エリゼさんにも頼み込むわ。」

「う……………」

答えを封じられ、表情を引き攣らせて唸った。

「……………いきなりの事だから返事に困るのも無理ないわ。だ、
だからその……………もっと私の事を良く知ってから、その時に返事を
ちょうだい……………」

「え、えっと……………アリサの事を良く知るって具体的にはどうすれ
ばいいんだ……………？」

「デ、デートよ、デート。お互いを知るには一般的でしょう？エリ
ゼさんとも当然した事はあるでしょう？」

「それはまあ、あるけど……………」

真っ赤な顔で言ったアリサの話を聞いたリインは頷いた後考え込み

「……………わかった。とりあえず返事はそれまでに保留という事で。それでどうする？もう、夕方だぞ？俺は明日の昼前の便でクロスベルを起ってメンフィルの帝都……………ミルスに戻らなければならぬから、あんまり時間はないぞ？」

気を取り直してアリサの提案に頷いた後ある事に気付いてアリサを見つめて尋ねた。

「そうね……………だったら……………」

そして尋ねられたアリサが答えかけたその時

「……………日を改めてデートをなさればよろしいかと。」

なんといつの間にか二人の背後にいて微笑みを浮かべているシャロ
ンが二人を見つめながら提案した！

第5話

く夕方・ミシユラムく

「なっ!？」

「シャ、シャロン!？」

シャロンの声を聞いた二人は驚いて振り向き

「うふふ、やはりアリサお嬢様はリン様の事を男性として意識されていたんですね♪この事を会長も知ればきっとお喜びになり、お二人の仲を祝福してくださりますわ♪」

「そ、それより一体いつから見ていたのよ!？というか貴女、部屋に戻って待っているんじゃないの!？」

嬉しそうな表情で言ったシャロンの言葉を聞いたアリサは真っ赤な顔でシャロンを睨んで怒鳴った。

「ラインフォルトグループの未来とアリサお嬢様の未来がかかっているのですから、このシャロン、心配で心配で居ても立っても居られなかったので、会長を見送った後お二人を探し回っていたのですわ。」

怒鳴られたシャロンは心配そうな表情で答え

「絶対！嘘でしょう！……興味があったからの間違いじゃないの！？」

シャロンの答えをアリサは突っ込んだ後ジト目でシャロンを睨み

「うふふ……ご想像にお任せしますわ♪」

睨まれたシャロンは微笑みながら答えた。

「というか全然気配を感じなかったのですが………」

一方リインは表情を引き攣らせながらシャロンを見つめ

「うふふ、ラインフォルト家にお仕えする前は」とある企業^{レギオン}で「
執行者^{レギオン}」という呼び方の役職を任せられていた身ですので。」

「なっ！？」執行者^{レギオン}「ってまさか「結社」の………！？」

微笑みながら答えたシャロンの答えを聞いたリインは驚いた後信じられない表情でアリサを見つめ

「……………ええ。リインの予想通り、シャロンはかつて「身喰らう蛇^{ウロボロス}」の「執行者^{レギオン}」だったそうよ……………最もその事を知ったのは最近だけだね。」

見つめられたアリサは疲れた表情で答えた。

「……………」

アリサの答えを聞いたリィンは口をパクパクさせ

（……大丈夫なのか？）

すぐに我に返って真剣な表情でアリサに小声で尋ね

（ええ。今のシャロンは真正銘のラインフォルト家のメイドよ。
それに「結社」は滅びたから大丈夫だと思うし。）

尋ねられたアリサは頷いて答えた。

「今は私の事よりお二方のデートの事が優先です。リィン様、次の
休暇はいつ頃になるのでしょうか？」

「へ？え」と……リフィア殿下のスケジュールに変更がなければ、
今の所は訓練だけだから来週の土日は休みですけど……」

シャロンに尋ねられたリィンは目を丸くした後考え込みながら答え

「でしたら来週の土曜日もこのミシユラムのテーマパークでデート
されてはいかがですか？デートスポットとして有名な所なのですか

ら、ちょうどいいかと。勿論、チケット等の手配は全て私が致します。」

「ハ、ハア………だったら、それでお願いします………」

シャロンの提案を聞いて戸惑いの表情を見せながら答え

「後で覚えていなさいよ………！」

アリサは真っ赤な顔でシャロンを睨んだ。

「——それとリン様。貴方のフィアンセの方の事をあまり侮っていてはその内……いえ、」すぐに「痛い目に遭いますので今後はお気を付けください♪」

「へ………それって一体どういう………！！！」

からかいの表情で言ったシャロンの言葉を聞いたリンが呆けたその時、ある事に気付いたリンは血相を変え

「え？え？一体何なの??」

リンの様子を見たアリサは戸惑った。するとその時

「………やっとお気づきになりましたか………私の気配にも気付

かないくらい随分アリサさんとの話が弾んでおられたようですね？」

膨大な威圧を全身に纏ったエリゼが建物の物陰から現れてジト目でリンとアリサを見つめながら近づいてきた！

「エ、エリゼさん……………」

「エ、エリゼ……一体いつから見ていたんだ……？というかいつの間にそんな気配を完全に隠せるような技術を……」

エリゼを見たアリサは大量の冷や汗をかき、リンは表情を青褪めさせた状態で尋ねた。

「これもエクリア様の教育の賜物です。——ちなみにお二人がベンチに座って話し始めたあたりからです。」

「うふふ、私はアリサお嬢様がリン様に情熱的な告白をしたあたりからですわ♪」

「ええっ！？エ、エクリアさんってあのラウラのお父さんをも超える凄腕の剣士の人——セリカさんに仕えているメイドの一人でしょう！？一体どれだけ凄いのよ！？」

「お、俺に聞かれても……………相当の腕利きである事は知っていたけど……………」

エリゼとシャロンの答えを聞いたアリサは驚いた後リンに視線を

向け、視線を向けられたリインは戸惑った。

「……………普段の兄様でしたら隠している私の気配に気付いていたのかもしれませんが、アリサさんとお見合いの件で頭が一杯になっていて注意が散漫になっていたのではないですか？」

「う……………」

絶対零度の視線で自分を見つめて言ったエリゼの言葉を聞いたリインは大量の冷や汗をかきながら表情を引き攣らせ

「それにやはり私の予想通り、アリサさんは『家の都合』ではなく『自分の都合』で今回の縁談に臨んだようですね……………」

更に膨大な威圧を全身に纏ったエリゼはジト目でアリサを見つめた。

「エ、エリゼさん……………その……………ごめんなさい！私、本当にリインの事を男性として好きになっちゃったの！勿論、エリゼさんを優先するからその……………重婚を許してくれないかしら……………」

するとその時アリサは頭を深く下げた後、不安そうな表情でエリゼを見つめて尋ね

「……………」

尋ねられたエリゼは真剣な表情でアリサを見つめていた。

「ハア……………これだとまるで私が二人の仲を引き裂こうとする悪役みたいじゃないですか……………」

そして少しの間アリサの目をジッと見つめていたエリゼは疲れた表情で溜息を吐き

「言っておきますけど、兄様の『性格』には相当苦労させられますよ？」

「アハハ……………それは身を持って既に思い知っているから大丈夫よ。」

疲れた表情で言ったエリゼの言葉を聞いたアリサは苦笑しながら答えた。

「い、一体何の話をしているんだ…………？」

二人の会話を聞いていたリィンは戸惑って尋ねたが

「「^{リィン}兄様は黙、っ、て、い、て。」」

「ハイ……………」

同時に膨大な威圧を纏って微笑みながら自分を見つめて言ったエリゼとアリサの言葉に肩を落として頷き

「うふふ……早速リン様のフィアンセであられるエリゼお嬢様と仲が良くなって何よりですわ♪これならご結婚後も仲の良いご家庭を築きそうですわね♪」

その様子を見守っていたシャロンは微笑んでいた。

「フフ……アリサさんとは色々と話が合いそうな気がしてきました。」

「アハハ……同感。エリゼさんと同じ“被害者”である私も思ったわ。エリィさん達なんか、もっと大変よねえ……」

「クスクス、確かにそうですね。———今後は“エリゼ”で結構ですよ。アリサさんの努力次第によっては“私達”と“家族”になるかもしれないのですから。」

「———わかったわ、よろしくね、エリゼ。」

「はい。」

そして二人はお互いを見つめて微笑み合い

「??？」

「フフ………」

互いを見つめて微笑みあっている様子の2人を見たリンは首を傾

げ、シャロンは微笑ましそうに見守っていた。

「兄様。」

するとその時エリゼはリインを見つめ

「な、なんだ。」

見つめられたリインは冷や汗をかきながらエリゼを見つめ返した。

「もしアリサさんの事を女性として本当に好きになられたのですから、責任を持ってアリサさんの事も私と共に受け入れてあげて下さい。――いいですね？」

「ええっ！？エリゼはそれでいいのか！？というか責任って何だよ……」

真剣な表情で自分を見つめて言ったエリゼの話を聞いたリインは驚いた後疲れた表情をし

「い・い・で・す・ね？」

「ハイ……」

膨大な威圧を纏って微笑みながら言ったエリゼの言葉に逆らえず、

肩を落として頷いた。

「フフ……………エリゼ公認なら、私も遠慮する必要はないわね。」

「へ……………」

そして微笑みながら言ったアリサの言葉を聞いたリィンが呆けたその時！

「ん……………」

なんとアリサはリィンの頬に口付けをし

「……………！！！！……………」

「……………！！！！……………」

「まあまあ……………！！！！……………」

口付けをされたリィンは混乱し、エリゼは目を見開いた後石化したかのように固まり、シャロンは嬉しそうな表情で見守りながら一瞬の動作で懷からカメラを出してアリサがリィンの頬に口付けをしている瞬間の写真を撮った。

「そ、その……………今のは私を2度も庇ってくれたお礼よ……………」

……唇や"その先"は私の想いに応えてくれたら、してあげるね……
……それじゃあ今日は失礼するわ！」

そして湯気が出るほど顔を真っ赤にしたアリサはリンを見つめて
言った後走り去り

「うふふ、それでは私もこれで失礼しますわ♪お二方とも、御機嫌
よう♪」

シャロンはスカートを両手で摘み上げて上品に会釈をした後アリサ
の後を追って行った。

「……………」

二人が去るとリンは石化したかのように固まり

「フ、フフ……………先程のアリサさんの行動は完全に油断していまし
た。まさか私の許可が出た瞬間堂々と私の目の前であんな事をして
くるとは……………もしキアさんの因果操作を受けずに兄様
がツールズ士官学院に通っていたら、私の想いは届かずアリサさん
の事を"義姉様"^{ねえ}と呼ぶ羽目になっていたかもしれないね……………
今度キアさんに会った時、お礼として何か奢ってあげないといけ
ませんね……………」

我に返ったエリゼは膨大な怒気のオーラを全身に纏って身体を震わ
せながら口元をピクピクさせていた。

「――ホテルに戻りますよ、兄様！お父様達との夕食が終わった
らすぐに愛し合います！今夜は私が満足するまで寝かすつもりはあ
りませんので覚悟しててください！」

「エ、エリゼ！？ちょっ、離せて！自分で歩くから……………！」

その後エリゼは強引にリンの片腕を両手で引き寄せて腕を組んだ
後リンを引っ張りながらその場から去って行った。

そして1週間後……………

第6話

1週間後、休暇でクロスベルのミシュラムまで来た私服姿のリインはテーマパークの入口で誰かを待っていた。

♪ミシュラム・ワンダーランド♪

「……………そろそろ約束の時間だけど……………あ。」

入口にある時計を確認していたリインは自分に向かって走って来る私服姿のアリサに気付いて声を上げ

「ハア、ハア……………ごめん。もしかして待たせすぎたかしら？」

リインに走って近づいてきたアリサは息を切らせながら申し訳なさそうな表情で尋ねた。

「いや、10分前に来たからそんなに待っていないし、待つのはエリゼとのデートで慣れてるし。」

「ちょっと、リイン？デートする相手の前で他の女性とのデートの事を口にするのはいかがと思うわよ？」

リンの答えを聞いたアリサはジト目でリンを見つめた。

「う…………ご、ごめん。」

「全くもう……………これだから鈍感男は性質たちが悪いのよね……………
……………まあいいわ、それじゃあ早速入りましょう！」

「ああ。」

そして二人はテーマパークの中に入って行った。

「うふふ♪」

二人がテーマパークに入っていく姿をシャロンは微笑みながら見つけた後、テーマパークに入っていく

「……………二人はテーマパークに入ったわ。——行くわよ。」

「う、うむ。」

「ハア……………何でエヴリーヌまで……………」

更にエリゼ、リフィア、エヴリーヌもテーマパークに入って行った。

「さてと…………どこから周ろうか？」

テーマパークの敷地内に入ったリィンは周囲を見回した後アリサに尋ね

「そうね…………まずはウォーミングアップ代わりに「鏡の城」はどうかしら？」

「わかった。それじゃあ行こうか。」

その後二人は「鏡の城」に向かった。

く鏡の城く

「何度見ても幻想的な城よね……………」

「ああ……………まあ、ロイド達の話だとあの城はクロイス家の手によってとんでもない仕掛けが施されていたらしいけどな。」

城を見つめて呟いたアリサの言葉に頷いたリィンは真剣な表情で答えた。

「クロイス家の？一体どんな仕掛けだったのかしら。」

「……何でも城の構造自体が完全に変わっていて中には鍊金術によって創られた魔導兵器が徘徊していて、最上階にはキーアー——」
零の至宝」をジオフロントにある仕掛けとつなげる装置があったらしい。」

「嘘！？……つくづくクロイス家ってとんでもない家だったようね……………」

リンの説明を聞いたアリサは驚いた後疲れた表情で溜息を吐き

「ああ。まあ、IBCを吸収したクロスベル帝国が軍を派遣して早期に徘徊していた魔導兵器を全て駆除して、装置の方も完全に破壊したらしいから大丈夫だけだな。」

「へ……………普通、娯楽施設の復興なんて後回しよね？確か私達が女神様達と一緒に休暇を過ごした日の時点で通常営業していたし……………もしかして女神様達を招待する為だったのかしら？」

リンの話聞いたアリサは目を丸くした後首を傾げた。

「ロイド達から聞いた話だと、ヴァイスハイト皇帝とギュランドロス皇帝直々の指示によって多くの観客達が訪れるミシュラムの復興は最優先にしたらしい。」

「なるほど……………確かにミシュラムは観光地として有名だから、多くの税の収入が見込めるものね……………って、何を考えているのよ、

私ったら！」

「ハハ……さすがは一流企業の経営者の娘だよな……——行こうか。」

「ええ。」

その後二人は城の中に入り、最上階まで登り、鐘を鳴らした後鏡の前に立った。

「えっと……確か鐘を鳴らした後に鏡の前で祈ればいいのよね？」

「ああ。」

「「……………」」

アリサに尋ねられたリィンは頷いた後、アリサと共に鏡を見つめた後目を伏せて黙り込んだ。

（アリサはまだ祈っているのか……………それにしてもこうして見て見ると可愛いよな……………って、何を考えてんだよ!?!）

祈りを終えたリィンは目を伏せて祈っている様子のアリサの顔をジッと見つめた後自分に突っ込んだ。

「…………リン？私の顔に何かついているのかしら？」

するとその時祈りを終えて目を開いたアリサは首を傾げてリンを見つめて尋ね

「い、いや！何でもないよ。それよりアリサは何を願ったんだ？」

尋ねられたリンは慌てた様子で答えを誤魔化すように逆に質問した。

「私？私は『ラインフォルトグループで働く人達の未来が明るい未来でありますように』……ね。」

「う…………それは遠回しに俺に婚約してくれてプレッシャーをかけているのか…………？」

アリサの答えを聞いたリンは大量の冷や汗をかきながら表情を引き攣らせて尋ね

「フフ、どうかしらね？——リンは何をお願いしたのかしら？」

尋ねられたアリサはからかいの表情で答えた後尋ねた。

「俺か？俺は『大切な人達をこの手で守れますように』…………かな。」

「クスクス、貴方らしいわね。」

リンの答えを聞いたアリサは微笑み

「そ、そうか？」

「ええ。実際に貴方は私を2度も庇ってくれたじゃない。」

「あれは勝手に身体が動いただけなんだけどな……それに仲間を庇うのは当然の事だし。」

「……………なるほどね。確かに貴方だったらⅦ組のリーダー的な役割を果たせたかもしれないわね。」

リンの答えを聞いたアリサは静かな笑みを浮かべて頷いた。

「へ？それってどういう意味だ？」

「さて、どういう意味でしょうね？——それじゃあ次に行きましょうか。」

「あ、ああ。」

その後二人は「鏡の城」を出てアリサの希望により、「占いの館」に向かい、順番を待って「占い師」がいる部屋に入った。

「占いの館」

「ふふ、いらっしゃい。さあ、こちらの椅子にお座りなさい。」

「はい。」

「わかりました。」

部屋に入った二人は占い師の女性の指示に頷き、椅子に座って占い師と対面した。

（これで会うのは2回目だけど、どこか神秘的な雰囲気を持つ人だな……………）

（そうね……………顔は隠れているようだけど綺麗な人みたいね……………）

占い師と対面した二人はそれぞれ小声で会話し

「ふふ、どうしたのかしら。人の顔をジロジロと見て。順番待ちの人もいるからすぐにとりかかりたいのだけど。」

占い師は口元に笑みを浮かべて二人を見つめて言った。

「っと、すみません。よろしく願います。」

そしてリンとアリサは占い師に軽い質問をされ、何を占うのか尋

ねられた。

「何を占うかはアリサに任せるよ。アリサの希望でここに来たんだし。」

「わかったわ。……………そ、それじゃあその…………私とリンの相性の占いをお願いします。」

「ええっ!？」

アリサの言葉を聞いたリンは頬を赤らめて驚き

「ふふ、それでは……………」

占い師は口元に笑みを浮かべて答えた後目の前にある水晶を光らせた。

（不思議…………水晶が輝いている…………）

（魔術の類いではないみたいだけど…………）

水晶が光っている様子をアリサはジッと見つめ、リンは考え込みながら見つめていた。

「…………見えたわ。己に眠る"力"を恐れ"道"に迷っていた青

年と全てを一人で抱え込もうとする少女……………以前、世界の存亡をかけた戦いに関わったことで二人には確かな信頼が芽生えている……………この想いを育めば、より深い関係になれる可能性は充分にあるでしょう。ただし……………その為には少女自身が自分の想いを青年にぶつける必要がある……………私に見えたのはこんな所かしら。」

「……………（エリゼと一緒に占ってもらった時もあったけど、凄く正確な占いだな……………俺の身体に眠っている"力"を言い当てるなんて……………）」

占い師の言葉を聞いたリインは真剣な表情で黙って占い師を見つめ続け

「え、えっとその……………ありがとうございます。お蔭で希望が見えてきました。」

アリサは頬を赤らめて嬉しそうな表情でお礼を言い

「ふふ、私は水晶玉に見えた暗示を伝えただけよ。」

お礼を言われた占い師は口元に笑みを浮かべて答えた。そして二人は部屋から退出した。

「……………そろそろ出てきたらどうかしら？……………いるのはわかっているわよ、"死線"。」

二人が退出すると占い師は静かな口調で呟いた。するとその時占い師の背後にあるカーテンからシャロンが姿を現し

「うふふ……お嬢様に希望の光の道筋を教えて下さってありがとうございます。——」"幻惑"様。」

姿を現したシャロンは微笑みながら上品な仕草で会釈をした。

「全く……若い子達のデートの覗きなんて、趣味が悪いのではなくて？」

占い師はシャロンに背を向けたまま呆れた様子で溜息を吐いた後答えた。

「私はアリサお嬢様の恋の行方を見守っているだけですわ。覗きだなんて、人間が悪いですわ。」

占い師の言葉を聞いたシャロンは心外そうな表情で答え

「……見守るのもほどほどにしておきなさい。でないとその内本当に嫌われるわよ？」

「まあ……！」"幻惑"様が仰ると本当にそうなりそうで恐ろしいですわ。お嬢様に嫌われるなんて……ああ！考えただけでも恐ろしいですわ……！」

占い師の言葉を聞いたシャロンは目を見開いて不安そうな表情になった後悲しそうな表情になった。

「…………五月蠅くて占いに集中できないからさっさとどこかに行ってくれないかしら？あんまり騒いでいたら営業妨害と不法侵入で保安部に突き出すわよ。」

シャロンの様子に占い師は呆れた様子で呟いた。

「かしこまりました。————それでは貴女の新しい人生が実りある人生である事を祈っております。"幻惑のルシオラ"様。」

「そちらもね。————"死線のクルーガー"。」

そしてシャロンはその場から音もなく去って行った。

「もう昼過ぎか…………そろそろランチにしないか？」

一方"占い師の館"を出ていくつからのアトラクションを楽しんだ後中央広場まで戻ってきたリィンは敷地内にある時計の時間を見た後アリサに提案し

「そ、そうね。それじゃあ休憩所に行きましょう。」

リィンの提案に頷いたアリサは頬を赤らめて自分のバッグに一瞬視

線を向けた後頷き、リインと共にその場から去って行った。

「……………？あの二人は……………どうしてリインさんとアリサさんが二人で……………————あ。……………」

二人が一緒に歩いてどこかに向かっている様子を遠目で見たティオは首を傾げた後ある事に気付いてジト目になって黙り込んだ。

「ティオー、どうしたのー？」

するとその時ティオの傍にいるキーアが話しかけた。

「……………いえ、改めて歴史がちゃんと守られている事を実感しただけです。それよりキーア、キーアにも手伝ってもらいたい事ができたのですが……………お願いできますか？」

「んー？」

ティオの話聞いたキーアは可愛らしい動作で首を傾げ

「いいですか？今からわたしは"Ⅶ組"の人達に連絡を取るののでキーアはロイドさん達に————」

ティオは静かな笑みを浮かべてキーアに何かの指示をし始めようとした。するとその時

「うふふ、それでしたらサラ様達の方は私の方で連絡を取っておき

ますわ。」

シャロンが微笑みながら二人に話しかけてきた。

「あ！メイドさんだー。」

「……………？貴女は一体……………」

シャロンを見たキーアは興味深そうな表情をし、ティオは不思議そうな表情で尋ね

「…………ラインフォルト家に仕えるシャロン・クルーガーと申します。ティオ・プラトー様とキーア様ですね？」ゼムリアの敵クロイス家の騒乱"時はアリサお嬢様がお世話になりました。それで折り入ってティオ様達にご相談したい事があるのですが……………」

尋ねられたシャロンはスカートを摘み上げて挨拶をした後ティオ達と何かの会話を始めた……………」

第7話

ミシユラム・休憩所

「さてと……俺は食べ物と飲み物を買って来るからアリサは席を取って置いてくれないか？」

休憩所に到着したリィンは周囲を見回した後アリサに視線を向けて尋ね

「そ、その事なんだけど……今日はお弁当と紅茶を持ってきたから………あ、勿論リィンの分も作ってあるわよ！」

「そうなのか？じゃあお言葉に甘えてご馳走になるよ。」

頬を赤らめて言ったアリサの話聞いて頷いた後、アリサと共に空いているテーブルの傍にある椅子に座った。

「え、えっと……はい、これが今日作って来たお弁当よ………」

椅子に座ったアリサは頬を赤らめてバッグからランチボックスと水筒を出し、ランチボックスの蓋を開けた。

「へえ………サンドイッチか。中には何が挟まれているんだ？」

ランチボックスの中に入っているサンドイッチを見たリインは目を丸くした後尋ね

「ハ、ハンバーグよ。後は野菜を少々。」

「そっか。じゃあ遠慮なく頂くよ。」

アリサの答えを聞いたリインはランチボックスに手を伸ばそうとした。するとその時アリサはリインが手を伸ばすより早く自分の手でサンドイッチを掴んでリインの前に差し出した。

「へ……………い、一体何を？」

「そ、その……………私が食べさせてあげるわ。」

自分の行動に呆けているリインにアリサは真っ赤にした顔で呟き

「ええっ！？い、いいって！自分で食べるって！」

アリサの言葉を聞いたリインは驚いた後真っ赤にした顔でアリサの申し出を断ろうとした。

「……………やっぱり嫌かしら……………？」

「うぐっ……………（その目は卑怯だろ……………）」

しかし真っ赤にした顔で上目づかいで自分を見つめるアリサを見た
リンは表情を引き攣らせ

「ハア……………わかったよ……………でも一口目だけだから……………」
疲れた表情で溜息を吐いて言った。

「！！！うん……………！」

リンの答えを聞いたアリサは真っ赤にした顔で嬉しそうな表情で
頷き

「はい、あゝん…………………………」

真っ赤にした顔でリンを見つめながら手に持ったサンドイッチを
差し出し

「あ……………む……………」

リンはアリサが差し出したサンドイッチを食べた。

「ど、どう……………？」

サンドイッチを食べているリンをアリサは不安そうな表情で見つ
めながら尋ね

「……………うん、美味しいよ。ハンバーグ自体も美味しい上野菜のチ

ヨイスもいいし、ソースもちょうどいい味だよ。」

「！！そ、そう…………一杯作ってあるからもっと食べていいからね…………！」

リンの答えを聞き、嬉しそうな表情で言った。

「まあまああ♪」

一方リン達からある程度の距離を取り、気配を完全に隠し、アリスのバッグに密かに取り付けた盗聴器で二人の会話を聞いているシヤロンはリン達の様子を嬉しそうな表情で導力ビデオで録画し続け

「うふふ、この調子なら本日手配した部屋をお使いになってくれるかもしれませんわね♪」

そして笑顔で呟き、食事をとっている2人を微笑ましそうに見つめていた。

「兄様に食事を食べさせる…………ですって…………！？しかも手料理を自らの手で…………！まさかその為のサンドイッチですか！？恋人同士になれた私ですらもまだやったことが無いのに………………！兄様も兄様です！私という婚約者がありながら、あんな誘惑にあっさりと屈するなんて…………！もしかして胸ですか！？確かアリサさんの胸は

情報に書いてある通りだと87……今年でようやく80になったばかりの私と比べると明らかに大きいですものね……！」

同じ頃、リン達からかなりの距離を取った席で片方の手にはクレ―プを持ち、リンの手荷物に仕掛けておいた盗聴器で二人の会話を聞きながらも片方の手で双眼鏡でリン達の様子を見ていた膨大な威圧を纏って口元をピクピクさせているエリゼは身体を震わせながら片手に持っている双眼鏡に力を入れた。すると双眼鏡からメキッという音が聞こえた後、双眼鏡に罅が入り始め

「ハア……エリゼよ、一体いつまで続けるつもりなのじゃ？」

エリゼの様子を見たりフィアは食事を取りながら呆れた表情で溜息を吐いた後尋ねた。

「あら……そんなの勿論、デートが終わるまでに決まっているじゃない。」

リフィアに尋ねられたエリゼは膨大な威圧を纏って微笑みながら答え

「覗きはあまりいい趣味とは思えぬぞ。……第一ラインフォルトの娘の恋が実った所で、お主が将来リンと結婚する事は変わらないじやろうが……というか何故余まで付き合わなければならぬのじや？せっかくの休暇だというのに……」

エリゼの答えを聞いたリフィアは呆れた様子で答えた。

「兄様が縁談を受ける事を決めた「原因」の一つであるリフィアは黙っていて。第一今日と明日を休暇にできるようにいつも以上に政務書類の片付けを手伝った上、スケジュールを調整したのは私である事を忘れたのかしら？」

「むう……………し、しかしだな。お主もラインフォルトの娘がリインの妻になる事は認めたのであるう？なのはどうして、そこまで目くじらを立てるのじゃ？」

しかし膨大な威圧を纏って微笑みを浮かべたエリゼに見つめられたリフィアは大量の冷や汗をかきながら唸った後、恐る恐る尋ねたが

「それとこれとは別問題よ。それに今後の兄様と私とのデートや3人でのデートの参考にもなるから、ちょうどいいのよ。ウフフフフフ……………」

「……………」

膨大な威圧を纏って微笑みを浮かべ続けるエリゼに何も言えず、表情を引き攣らせて黙り込んだ。

「どうでもいいけど何でエヴリーヌまで一緒に付き合わなくちゃ駄目なの？……………さっきなんかエヴリーヌにお昼ご飯を買いにいかせたしさ……………ハア……………」

同じようにリフィアの傍でクレープを食べていたエヴリーヌは疲れ

た表情で溜息を吐き

「エヴリーヌ様の転移魔術は食事や飲み物を速やかに確保する時や兄様たちを見失った時に探す時、そして兄様たちに気付かれそうになった時の撤退用に必要です。」

「あのね……転移魔術を……というか魔神を何だと思っているの？」

エリゼの答えを聞いたエヴリーヌは呆れた様子で尋ねた。

「あら……何か私に仰りたい事でもおありなのですか？」

「……………べ、別に……………」

しかし膨大な威圧を纏って微笑みながら自分を見つめるエリゼに反論できず、エヴリーヌは表情を青褪めさせ、身体を震わせながらエリゼから視線を逸らして答えた。

「フウ……………ごちそうさま。美味しかったよ。」

「お粗末様でした。」

「……………けど、アリサが料理が上手だなんて意外だったよなあ……………」

「あら。もしかしてラインフォルトグループの令嬢だから料理がで

きないと思っていたのかしら？」

リンの話聞いたアリサはからかいの表情で尋ねた。

「うっ……………そ、その……ゴメン……………」

アリサに尋ねられたリンは表情を引き攣らせた後申し訳なさそうな表情で謝罪し

「フフ、別に気にしないで。私も士官学院に入学する時までは料理の経験はなかったし。」

「へ……………じゃあ何で料理が上手くなったんだ？やっぱり授業とかでか？」

アリサの話を聞いたリンは目を丸くした後不思議そうな表情で尋ね

「まあ、それもあるけど“特別実習”の時に自然と料理をみんなで作るようになったのよ。」

尋ねられたアリサは微笑みながら答えた。

「“特別実習”？一体何なんだ、その授業は。」

「えっと……………」

そしてアリサはリンに「特別実習」の内容を説明した。

「へー………何だかやっている事が遊撃士や特務支援課に近いな。」

「そうね。まあオリヴァルト殿下は最終的には私達に「貴族派」でもなく、「革命派」でもない「第3の道」を見つけて欲しい為に「VII組」を提案したらしいわ。」

「そうだったのか………なるほど、だからオリヴァルト殿下はオルキスタワーで話した時、あんな事を俺達に言っていたのか………」

アリサの説明を聞いたリンは頷いた後ある事を思い出して呟いた。

「??? 一体何を言っていたのかしら?」

「ああ。「特務支援課」をツールズ士官学院に特別講師として招きたいみたいな事を言ってたんだ。」

「へー………フフ、確かに特務支援課だったら「VII組」の特別講師としてちょうどよかったのかもしれないわね。」

リンの話聞いたアリサは目を丸くした後苦笑した。

「ハハ………あれ? そう言えば今気付いたけど………一体どこでさっきのランチを作ったんだ? ヘイムダル経由で来ていると思うから、多分昨日の内に俺みたいにクロスベルに来てホテルに泊まっていたんだよね?」

アリサに続くように苦笑していたリインはある事に気付いて不思議そうな表情で尋ね

「……うん、トリスタの学生寮で作って朝早くに出たから……6時頃に起きてランチを作った後 Heimdal まで鉄道で行って、その後は飛行船でクロスベルまで来たわ。」

「ええっ！？な、何でそこまでしてお弁当を作ったんだ……？」

アリサの答えを聞いて驚いた後戸惑いの表情で尋ねた。

「だって……好きな人に……手作りの料理を……
……食べて……欲しかったんだもん……」

リインに尋ねられたアリサは真っ赤にした顔を俯かせて途切れ途切れに呟き

「ア、アリサ……」

アリサの答えを聞いたリインも顔を真っ赤にして俯かせ、黙り込んだ。

「まあまああ♪うふふ、その調子ですわよ、お嬢様♪」

一方その様子をビデオで録りながら二人の会話を聞いていたシャロンは嬉しそうな表情で呟き

「フ、フフ……………よかったわね、リフィア……………？今の調子だと二人の婚約は成立しそうよ……………？しかも相思相愛という形で。」

同じように双眼鏡で様子を見守りながら二人の会話を聞いていたエリゼは片手に持った罫だらけになった双眼鏡に力を入れて破壊した後リフィアに微笑み

「そ、そうか……………政略結婚は個人的にはあまり良いとは思えぬ。け、結果的にはよかったのではないか……………？」

「ガタガタブルブル……………（こ、怖いよ……………い、今すぐここから逃げたいよ……………）」

膨大な威圧を纏い、背後には魔力によって発生した電撃がバチバチと迸るほどの魔力を全身に纏って極上の微笑みを浮かべるエリゼに見つめられたリフィアは表情を青褪めさせ、大量の冷や汗をかきながら身体を震わせて答え、エヴリーヌもリフィアのように大量の冷や汗をかきながら恐怖の表情で身体を震わせて必死にエリゼを見ないようにし

（エヴリーヌどころかこの我すらも恐怖させるとは……………女の嫉妬とは時には「魔神」すらも超えるのだな……………正直、ザハーニウの方がまだマシに思えて来たぞ……………）

リフィアの身体の中にいるディアーネも冷や汗をかいて若干顔色を悪くしながらエリゼから視線を逸らしていた。

「……………」

一方互いに顔を真っ赤にした二人は黙り込んで俯いていた。

「そ、そうだ！腹ごなしにホラーコースターにでも行かないか！？」

するとその時リィンが慌てた様子で立ち上がって提案し

「そ、そうね！そうしましょう！」

リィンの提案にアリサは慌てた様子で頷いて立ち上がった。

そして二人は休憩所から去って行き、二人を追うかのようにシャロ
ンやエリゼ達もそれぞれ動き始めた……………

第8話

「ホラーコースター」

「これがフィー達が遊んだアトラクションね。何でもフィーとマキアスが一緒にやって記録を更新したらしいわよ？」

「ハハ……本職の人がやるのはある意味反則だろ……まあ、それを言ったらアリサも同じかもしれないが。」

建物の入口の前で呟いたアリサの話を聞いたリィンは苦笑し

「アハハ……弓と銃じゃ全然違うわよ。確かに遠距離武器である事は同じだけど……」

リィンの言葉を聞いたアリサも苦笑した。

「そう言えばアリサはお化けとか大丈夫か？」

「フフ、お化けよりもっと怖い存在と戦ったんだから今更じゃない。」

「ハハ、確かにな。……じゃあ、行こうか。」

そして二人は建物に入ってアトラクション……ホラーコースタ

―で遊び始めた。

「アリサ、右から新手が来たぞ！」

レールを走る乗り物の上でリィンは乗り物に備え付けてある導力銃でアトラクションで出てくる作り物のお化けに向かって撃ちながら指示をし

「ええ、任せて！」

指示をされたアリサも導力銃を撃って迫って来る作り物のお化けに命中させていた。そして二人は順調にスコアを伸ばしていた。

「フフ、やるじゃない、リィン！剣士なのに結構命中率がいいじゃない！」

「ハハ、初心者でも当たるように設計されているだけだよ。でも、この調子ならスコアの記録を更新できるかもしれないな……！」

「フフ、そうね！」

リィンの推測にアリサは微笑みながら導力銃を撃って作り物のお化けに命中させていた。するとその時乗り物は大きなカーブに差し掛かり

「キャアッ！？」

「っと!？」

急カーブによってアリサはリインに倒れ掛かり、二人は互いを抱きしめあった状態になった。

「び、ビックリしたわ……………!」

「油断しすぎていたな……………!」

そして互いを抱きしめ合った状態になった二人は互いの状況に気付いて顔を真っ赤にし

「ご、ごめん!わざとじゃないんだ!」

「う、ううん!気にしないで!私の方から倒れ掛かったようなものだ!……!」

それぞれ慌てた様子で互いの距離を離れた。その後乗り物はゴールに到着し、二人は真っ赤にした顔で建物から出た。

「え、えっと……………本当に気にしないでね?さっきのは完全に事故なんだから……………」

顔を真っ赤にしたアリサは焦りながらリインを見つめて呟き

「あ、ああ。それじゃあ次のアトラクションに行こうか。」

同じように顔を真っ赤にしていたリィンは氣を取り直してその場から去って行った。

（うふふ、さすが「幻惑」様の占いですわね♪）

その様子を物陰から見つめながら盗聴器で会話を聞いているシャロンは微笑ましそうな表情をし

「……………」

シャロンとは違う位置で新しい双眼鏡で様子を見つめ、盗聴器で会話を聞きながら膨大な威圧を纏い続けているエリゼは双眼鏡を持つ両手に再び力を入れて双眼鏡に罅を入れ始め

「ガタガタブルブル……………」

エリゼの近くにいるエヴリーヌは恐怖の表情で身体を震わせ

「エ、エリゼ…………少しは落ち着いたらどうじゃ…………？」

同じようにエリゼの近くで表情を青褪めさせて身体を震わせているリフィアは恐る恐るエリゼを見つめて言った。

「あら…………私は落ち着いているわよ…………？アリサさんが兄様の妻の一人になる事は私も認めているのだから…………リフィアった

ら、何をおかしなことを言っているのかしら……？」

リフィアの言葉を聞いたエリゼは膨大な威圧を纏った極上の微笑みを浮かべて二人を見つめ

「ヒッ!？」

「ぬおっ!？」

エリゼの微笑みを見たエヴリーヌとリフィアは悲鳴を上げた。その後リン達はアトラクションをいくつか廻っていると夕方になり、二人は最後に遊ぶアトラクションとして観覧車に乗った。

く夕方・観覧車く

「ゴンドラがどんどん高く上がって行く……フフ、ちょっと緊張してきたわね。」

ゴンドラの中でリンと向かい合って座っているアリサは窓から見える景色を見つめて微笑み

「ハハ、前に乗った時はちょっとの間だけ止まったからビックリしたんだよなあ……」

リンは苦笑しながら答えた。

「うふふ、ここが勝負所ですわよ、お嬢様♪」

一方その様子を地上でビデオで見つめ続けているシャロンは微笑み

「フ、フフ……今までの事を考えると高確率で良い雰囲気になって、そのまま二人は………という事になりそうね………実際以前に私と乗ってキスをした時も同じ状況でしたものね………!!」

「……………」

シャロンとは違う位置で地上から罅を増やし続けている双眼鏡で見つめ続けているエリゼは膨大な威圧を纏って口元をピクピクさせ、エリゼの傍にいてエリゼが出し続けている威圧を近くで受け続けているリフィアとエヴリー又は表情を青褪めさせて身体を震わせ、またエリゼ達の周囲にいた観光客達はエリゼ達から逃げるように移動し、エリゼ達がいる場所を中心に避け、エリゼ達がいる場所だけぽっかりと空いていた。そしてゴンドラは頂上近くまで上がって行った。

「綺麗……………思わずため息が出ちゃいそう……………」

「ちょうどいい時間だったみたいだな。」

アリサは立ち上がってゴンドラから見える景色にうっとりし、リィ

ンは口元に笑みを浮かべて答えた。するとその時ゴンドラに衝撃が起こった後、ゴンドラは止まった！

「キャッ！？」

するとその時アリサは倒れ掛かれ

「危ない！」

倒れ掛かったアリサを見たリインは正面からアリサを受け止め、リインとアリサは互いを見つめ合った。

「……………」

お互いを見つめ合った二人は再び顔を真っ赤にして黙り込み

「ご、ごめん！」

リインは慌ててアリサから離れようとした。しかしアリサは両手でリインの身体を強く抱きしめ、リインを離さなかった。

「ア、アリサ…………？」

「そ、そのリイン……………今日一日私と付き合ってたかしら…………？そ、そろそろ返事をくれないかしら…………？」

「あ……………」

真っ赤な顔で自分を見つめて言ったアリサの言葉を聞いたリインは呆けた声を出した後考え込み、そしてやがて口を開いた。

「最初に会った時はさ、ただ単純に可愛くなって思ったな。」

「え……………」

「それでお見合いでアリサと話して……………責任感が強く、家族を大切にしている優しい女の子だなんて思ったな。」

「……………」

「そして今日君と接して……………何度もドキドキしたな……………こんな可愛くて優しい女の子が俺に好意を寄せてくれるって知って、正直嬉しかったよ。」

「リイン……………」

リインの話を聞いたアリサは嬉しそうな表情で涙を流し

「……………好きだよ、アリサ。一人の女の子として、君が。……………まあ、エリゼの事も愛しているから二股になるんだけど……………ハハ……………それでもいいかな？」

リインは静かな笑みを浮かべて告白した後苦笑した。

「嬉しい……………！その言葉を聞きたかったの……………！……………ん……………！」

リインの告白を聞くと、アリサは自分の唇をリインの唇に重ね

（アリサ……………）

リインはアリサの口付けを受け入れ

「リイン……………ん……………好き……………ちゆる……………大好き……………！……………ちゅ……………愛している……………！……………ん……………ちゅ……………ちゆる……………！……………！」

（俺は幸せ者だな……………二人の女性からこんなにも強い好意を寄せられているなんて……………）

更に舌を搦めて深い口付けを求め、自分を強く抱きしめ続けるアリサの行為を受け入れ続け、二人はゴンドラが再び動き出すまで口付けをしていた。

「まあまあ……………！おめでとうございます、アリサお嬢様♪うふふ、"結社"に入社していたお蔭で、遠方からでも録画できるビデオが手に入り、今の瞬間も録画できますから、"結社"に入社していて本当によかったですわ♪……………あ、そう言えば恋人同士にな

ったらする肝心な「行為」は残っていますわね♪うふふ、今の内にお二人が今晚泊まる部屋に設置しに行かないと♪お嬢様が大人の女性になる瞬間は絶対に見逃せませんしね♪あ、会長にも報告をしておきませんと♪―――会長ですか？シャロンです。実はお嬢様とリン様の婚約の件で至急報告したい事がございまして……………」

一方深い口付けをしている様子を片手に持ったビデオで見つめ続け、会話を聞いていたシャロンは嬉しそうな表情で微笑みながら二人が口付けを終わらせるまでビデオを録りづけた後、エニグマを取り出して誰かと通信をしながらその場から去り

「……………」

同じようにシャロンとは違う位置で地上からメキメキと悲鳴を上げて罅を増やし続けている双眼鏡で見つめ続け、会話を聞いているエリゼは膨大な威圧に加え、さらに背後には魔力によって発生した電撃がバチバチと迸るほどの魔力を全身に纏うと共に目にも見えるほどの怒気をメラメラと燃やし続け、そして顔から離して片手に持った双眼鏡に力を入れた。すると双眼鏡はバキッと音をたてて破壊され

「ヒッ!？」

「ぬおっ!？エ、エリゼ……………一体どうなったのじゃ…………？」

その様子を近くで見ていたエヴリー又は悲鳴を上げ、エヴリーと共に悲鳴を上げたりフィアは恐る恐る尋ねた。

「……………兄様とアリサさんの婚約が今この時を持って、成立したわ。————行きましょう、リフィア殿下、エヴリーヌ様。今日の内に二人が正式に婚約した事をリウイ陛下達とヴァイスハイト陛下達に報告します。」

「あ、ああ……………」

「ほ……………よ、ようやく終わった……………」

そして耳に付けていた盗聴器を外し、威圧や魔力を引っ込めて静かな表情で答えるエリゼの様子にリフィアは戸惑いながら頷き、エヴリーヌの安堵の表情で溜息を吐き、そして3人はその場から去り始め

（……………兄様を独占できるのは今日だけですからね、アリサさん……………）

リフィア達と共に去り始めたエリゼは振り向いて少しの間観覧車を見つめた後リフィア達と共にその場から去って行った。そして観覧車から降りた二人は互いの手を繋いでテーマパークから出た……………

第9話

ミシユラム・ワンダーランド・入口

「え、えっとこれからどうする……？夕食は一緒にどこかのレストランで食べるか……？」

アリサと共にテーマパークから出たリィンは恥ずかしそうな表情でアリサを見つめて尋ね

「えっと……実はシャロンがミシユラムにあるホテルの部屋を手配してくれたの……もしリィンが私の想いを受け入れてくれたら、そこで一晩一緒に過ごしてって。――ちなみに「ホテル・デルフィニア」のスイートルームよ。」

「ええっ！？あの高級ホテルの……しかもスイートルーム……！？
というかア、アリサ……自分の言っている言葉の意味がわかっているのか……？」

アリサの答えを聞いて驚いた後真っ赤にした顔でアリサを見つめて尋ねた。

「そ、それぐらいわかっているわよ！それとも何？私の身体には興味はないの……？」

尋ねられたアリサは真っ赤にした顔で答えた後リインの片腕に服の上からでも膨らんで見える自分の胸を押し付け、リインを見つめた。

「そ、それは……………というか、幾らなんでも早すぎないか……………？ 今日付き合いたしたばかりだぞ……………？」

「そ、そんなの関係ないわ！ だ、第一私達は将来結婚する事が決まっているのだからいいのよ……………！ そ、それに……………私はエリゼと違って、貴方と頻繁には会えないんだから……………それぐらいはいいでしょう……………？ 次はいつに会えるのかわからないし……………」

「わ、わかった。アリサがそう決めたのなら俺はいいよ。」

その後二人はホテルにチェックインしてホテルのレストランでディナーを楽しんだ後、部屋に戻った。

〃夜・ホテル・デルフィニア・スイートルーム〃

（お、落ち着け……………！ 既にエリゼと何度もあった事があるじゃないか……………！）

部屋のベッドに座っているリインは高鳴り始めている心臓を落ち着

かせるかのように片手を胸に置いて考え込んでいた。

「ま、待たせたわね……………」

「!?!」

するとその時バスタオルを身体に巻いたアリサが現れてリインに近づき、それを見たリインは目を見開いて再び固まり

「そ、その……………私、初めてだからできるだけ優しくしてね……………」

リインの隣に座ったアリサは顔を真っ赤にしてリインを見つめた。

「ぜ、善処する……………」

見つめられたリインは緊張した様子で答え

「そ、それと……………今日は大丈夫な日だから……………好きなだけ中に出していいわよ……………ううん、中に出して……………初めては好きな人とずっと繋がりたいから……………」

「ええっ!?!」

顔を真っ赤にして呟いたアリサの言葉を聞いたリインは驚いて声を上げた。そしてアリサはバスタオルを外し、大人の雰囲気纏わせ上下の黒いレースの下着姿になり

「リイン……私を貴方のものにして……ん……！ちゅ……ちゅる……」

（アリサ……）

そして二人は愛し合い始めた。

〓20分後〓

「どう……リイン……私の……んしょ……気持ちいいかしら……？」

「あ、ああ……気持ち……いいよ……！」

「あらあらまあまあ♪お嬢様ったら、"本番"の前にエリゼお嬢様では少々難しい自分の魅力を存分に使ってリイン様に奉仕をして喜ばせるなんて……ううっ、本当に色々と成長しましたわね……」

リイン達とは別室の個室で椅子に座り、上品な仕草で紅茶を飲んで窓から見える夜景を見つめながら、盗聴器でリインとアリサの"行為"によって聞こえて来る会話を聞いていたシャロンは嬉しそうな

表情で微笑んだ後噓泣きをし

「うふふ、今後は同じフィアンセであられるエリゼお嬢様に追いつく為にも寝室で殿方を喜ばせる"教育"が必要ですわね♪」

そしてからかいの表情になって呟いた。

〃40分後〃

「あ……あ………！ねえリィン………私の………気持ち
ちいい………？」

「ああ………！気持ち良すぎて………すぐに………出そうだよ………」

「嬉しい………！………いいわよ………好きナだけ出して………
………！私の………に………！胸も………もっと強く揉んで………
………！………」

「フ、フフ………将来結婚したら、寝室でアリサさんと私………ど
ちらが兄様の妻として上なのか、ハッキリさせておく必要があります
うですね………！その時に備えてエクリア様にもっと殿方を
喜ばせる技術を学ばなければなりませんね………！口や手で殿方

を喜ばせる技術を磨きつつ、胸を大きくする努力を今以上にしないと……！ウフフフフフ………！！」

シャロンが泊まっている個室とは違う個室にある椅子に座り、目の前の壁を見つめながら盗聴器でリンとアリサの「行為」によって聞こえてくる会話を聞いているエリゼは膨大な威圧に加え、さらに背後には魔力によって発生した電撃がバチバチと迸るほどの魔力と目にも見えるほどのメラメラと燃え続ける怒気を全身に纏いながら、極上の微笑みを浮かべて口元をピクピクさせ、手に持っている紅茶を飲み終え、皿に置いたカップをカタカタと音をたてさせて震わせていた。

「ガタガタブルブル……（や、やっと終わったと思ったのに………
………お、お願いだから………だ、誰かエヴリーヌを助けて………！！
この際フェミリスでもいいから………！！）」

エリゼがさらけ出している威圧の余波を受け続けているエヴリーヌはベッドの中で布団を被って身体を丸くして表情を青褪めさせ、更には涙目になって身体を震わせて強く祈り続け

「エ、エリゼよ……もうそれくらいにしたらどうじゃ………？そ、そのな………？他人の情事を盗み聞きするのは「人」として間違っていると思うぞ………？」

エヴリーヌのように表情を青褪めて身体を震わせていたりフィアは恐る恐るエリゼを見つめて言い

「バカ！余計な事を言ってそれ以上火に油を注ぐような真似をしないでよ！」

リフィアの発言を聞いたエヴリー又は起き上がって焦った表情でリフィアを見つめて言った。するとその時

「フフ、何をおかしなことを言ってるのかしら、リフィアったら？兄様とアリサさん……お二人共〃他人〃ではなく、私と一緒に〃夫婦〃になる関係よ？将来結婚して、お互いの愛を確かめ合って、子供を作る時に必要な情報よ……？」

「ヒッ！？」

「ぬおっ！？」

エリゼは極上の微笑みで振り返り、エリゼの微笑みの背後に浮かぶ〃修羅〃の幻影が見えたリフィアとエヴリー又は悲鳴を上げた。

「フフ、リインったら凄く元気なんだから………私が胸と口でしてあげた時に1回出して………その後私の処女を貰いてたくさん中に出した上………さらに口で綺麗にしてあげた時にまた元気になって、そのまま私の口の中にもう1回出してそこからもう1回私を抱いてたくさん中に出すとは思わなかったわ………エリゼも貴方の相手は大変だったでしょうね………」

その後「行為」を終え、生まれたままの姿になり、ベッドに寝転んでいるアリサは微笑みながら隣にいるリインを見つめ

「うぐっ………で、でもな。言っておくけどエリゼの相手をする方が大変なんだからな。ああ見えて「その時」になったら俺が満足しても何度も求めて来る上、「そっち方面」の技術を滅茶苦茶知っているんだよ……」

見つめられたリインは唸った後疲れた表情で答えた。

「こーら。愛し合った後で他の女性とした時の話をするなんて、マナー違反にも程があるわよ？」

「す、すまない………」

そして頬を膨らませたアリサに額を軽く叩かれたリインは申し訳なさそうな表情で謝罪した。

「フフ、まあ私の方が割り込んできた女だから見逃してあげるわ。――――将来、エリゼと一緒に幸せな家庭を作りましょうね。」

「ああ………！」

「リイン………大好き………！ん………！」

その後二人は互いを抱きしめて深い口付けを交わした後、そのまま眠りはじめた。そして翌日………

第10話

翌日朝食を取り、チェックアウトをした二人はホテルを出た。

〵翌日・ミシユラム〵

「わっ!？」

「キャッ!？」

二人がホテルを出るとフラッシュによる光が二人を照らした。

「いやゝ、本当に未来のキーアちゃんの言う通りになったわねゝ。
そのお蔭でいいスクープ写真が撮れたけどね♪」

するとその時女性の声が聞こえて来た後二人に近づき

「ええっ!？あ、貴女は確か新聞記者の……………!」

「グ、グレイスさん!？一体どうしてここに……………!？」

女性————グレイスを見たアリサは驚き、リンは驚いた後信じ

られない表情で尋ねた。

「フフ、お姉さんはラインフォルトグループ会長の秘書さんに呼ばれて来ただけよ♪」

尋ねられたグレイスは口元に笑みを浮かべて答え

「へ……………ラインフォルトグループ会長の秘書ってまさか……………
…！」

「シャロン！！さては貴女の仕業ね！？」

グレイスの答えを聞いたリィンは呆けた後目を見開き、アリサは真っ赤にした顔で怒鳴った！

「うふふ、グレイス様に関しましてはティオ様経由になりますので正確には私ではありませんわ。」

するとその時シャロンが微笑みながらグレイスの背後から現れ

「へ……………ティオって……………」

「ま、まさか……………！！」

シャロンの言葉を聞いたリィンは呆け、アリサは目を見開いた。

「――勝手にわたしに責任をなすりつけないで下さい。シャロンさんが頼んで来たじゃないですか。通信社の知り合いがいるなら、その人に知らせて今日ここに来させてほしいって。」

するとその時ジト目でシャロンを見つめるティオがグレイスたちの背後から現れ、ティオに続くようにロイド、エリィ、ランディ、キ―ア、セティ、シャマーラ、エリナが次々と現れた！

「なっ！？ロ、ロイド！？それにエリィ達も！？」

「ど、どどど、どうなっているのよ！？」

ロイド達を見たリィンは驚き、アリサは混乱し

「ハ、ハハ……………えっと……………二人とも、とりあえずおめでとう。」

「おめでとー♪二人ともアツアツだねー♪」

「このリア充野郎がっ！！お前もロイドと一緒に爆発しろっ！！」

「ア、アハハ……………リィンさんもロイドさんと同じだったみたいだね……………」

「……………まあ、シャロンさんから話を聞いた所だと、こうなってしまったのも若干私達にも責任があるような気がします……………」

「フフ、でもそのお蔭でお二人は両想いの関係になれたからいいと思いますよ。」

「フフ……昨日テーマパークで2人がデートしているって話の連絡をティオちゃんから貰ったのよ。」

ロイドは苦笑しながら答え、キーアは無邪気な笑顔を浮かべ、ランディは悔しそうな表情でリインを睨んで叫び、シャマーラは表情を引き攣らせ、エリナは冷や汗をかきながら苦笑し、セティとエリイは微笑みながら答えた。

「なっ!?!」

「まさか……昨日のテーマパークにティオちゃんもいたの!?!」

エリイの話を聞いたリインは驚いて声を上げ、アリスは信じられない表情で尋ねた。

「ええ。キーアと一緒に昨日までやっていた"みっしい"の限定イベントを観終えた帰りにお二人がデートをしている様子を偶然見かけたんです。……ちなみにその時にシャロンさんと出会ってグレイスさんをこの場に呼んで欲しいって頼まれたんです。」

「ええっ!?!」

「シャロン! どうしてそんな事をしたのよ!?!」

ティオの説明を聞いたリインは驚き、アリサは真っ赤になった顔でシャロンを睨み

「うふふ、ラインフォルトグループ会長のご息女であられるアリサお嬢様とルーレの領主の一人、シュバルツァー伯爵のご子息であられるリイン様のご婚約の件を"お客様達"――メンフィル帝国とクロスベル帝国の方々に知らせる為ですわ。」

「……………」

微笑みながら答えたシャロンの話を聞いたリインは口をパクパクさせ

「あ、貴女ね……………！テーマパークにいたティオちゃん達と会ったって事はさては私達のデートも覗いていたわね！？」

アリサは怒りの表情で身体を震わせた後大声で怒鳴った！

「うふふ、何の事やら♪私の記憶に残っているのは午前中は"鏡の城"にて共に祈りを奉げた後占い師の館に向かい、昼食時はアリサお嬢様自らの手でお嬢様の手料理をリイン様に食べさせてあげ、ホラーコースターではお互いの身体を抱きしめ合い、デートの最後は夕陽で綺麗な景色の中、ゴンドラの中でお互いを抱きしめて情熱的な接吻を交わしているお二人を"たまたま"見かけただけですわ♪」

「ええっ!？」

「何イッ!？」

「わあー♪リンとアリサ、すっごくラブラブだねー♪」

微笑みながら答えたシャロンの話を聞いたロイドは驚き、ランディは厳しい表情でリンを睨み、キーアは無邪気な笑顔を浮かべ

「エリゼさんが知ったら何て言うでしょうね。」

「……というかしきたらですけど、シャロンさんみたいに遠くから見ていたんじゃないですか……？」

エリィとティオはジト目でリンを見つめ

「ア、アハハ……まさにロイドさん2号だね……」

「今度は何人の“被害者”が出るんでしょうね……？」

「さ、さすがにロイドさんの状況のようにはないと思うのですが……」

シャマーラとセティ、エリナはそれぞれ大量の冷や汗をかきながら表情を引き攣らせ

「ブッ!？」

「そのどこが」たまたま」なのよ!! ほぼ最初から覗いていたじゃない! 第一観覧車での出来事なんて、双眼鏡でも使わない限りわからないでしょう! ? しかもホラーコースターでの出来事なんて一体どうやって覗いていたのよ! ?」

リインは吹き出し、アリサは顔を真っ赤にして怒鳴った。

「うふふ、それよりお嬢様。クラスメイトの方達にデートの件を黙っているなんて、水臭いですわよ♪」

「へ……………」

「ま、まさかシャロン…………貴女……………!」

微笑みながら言ったシャロンの言葉を聞いたリインは呆け、アリサは身体を震わせながら真っ赤にした顔でシャロンを睨んだ。するとその時

「ふふ、そのまさかよ♪」

なんと口元に笑みを浮かべたサラが「VII組」の面々と共にロイド達の背後から現れた!

「ア、アハハ……えっと……おめでとう、アリサ。」

「アハハ……お、おめでとうございます、アリサさん、リンさん。」

エリオットとエマは苦笑しながらアリサとリンを見つめ

「おめでと、アリサ。」

「俺からも祝福の言葉を贈ろう。——二人ともおめでとう。」

「おめでと、アリサ！」

「そ、その……とりあえずよかったな、アリサ。」

フィーとガイウスは静かな口調で呟いてリンとアリサを見つめ、ミリアムは無邪気な笑顔を浮かべ、マキアスは冷や汗をかいて苦笑しながら答え

「そなたの事情はシャロン殿から先日聞かされ、知っている。……何はともあれ、結果的には相思相愛の仲になれた事、心から祝福しよう。」

「フ……政略結婚がきっかけで相思相愛になる等、お前ぐらいだぞ。」

「いや、休みの日に朝早くに起きてわざわざこっちまで来た甲斐

が あ っ た わ ♪」

ラウラは静かな表情でアリサを見つめ、ユーシスは静かな笑みを浮かべ、サラはからかいの表情で二人を見つめながら言った。

「な、ななななななっ!？」

「シャロン!！」

一方リィンは顔を真っ赤にして混乱し、アリサは真っ赤にした顔でシャロンを睨んで怒鳴った。

「やれやれ……………相変わらず騒がしい奴等じゃの。」

「リフィアが言える義理はないと思うけど。」

するとその時呆れた表情をしたリフィアとエヴリーヌがそれぞれリィン達に近づいてきた。

「ええっ!？あ、貴女達は…………!！」

「リ、リフィア殿下!？どうしてこちらに!？それにエヴリーヌ様まで……………!！」

リフィアとエヴリーヌを見たアリサは驚き、リィンは信じられない

表情で尋ねた。

「まあ、余も若干ではあるが此度の縁談には関与していたからな。関与した者の一人として行く末を見守らせてもらったのじゃが………どうやら良い方向で話は纏まったようだな？」

尋ねられたリフィアは疲れた表情で答えた後苦笑しながら二人を見つめ

「は、はい！」

「そ、その……ありがとうございます！殿下の進言のお蔭でリインとお見合いができて、婚約できましたから……！」

見つめられたリインは姿勢を正し、アリサは頭を深く下げた。

「うむ………まあエリゼの事を忘れてやるなよ。」

「ガタガタブルブル………」

二人の様子を見たリフィアは頷いた後大量の冷や汗をかきながら呟き、リフィアの口からエリゼの名前が出ると昨日のエリゼの恐ろしさを思い出してしまったエヴリー又は表情を青褪めさせて身体を震わせ

「ええ、それは勿論。」

「エリゼと一緒に幸せな家庭を築くつもりです！」

リンとアリサはそれぞれ頷いた。

「あ、それとアリサさん。あたし達の会社のせいでアリサさんの会社に凄い迷惑をかけてしまって本当にごめんね？」

「アハハ……気にしないでいいわよ。商売は競争社会なんだから、貴女達には何の責任もないわよ。」

シャマーラの言葉を聞いたアリサは苦笑しながら答え

「……おわびになるかどうかはわかりませんが、「工匠」になる講習で企業に務めている方達の優先枠を特別に作る事にしました。」

「西ゼムリアでは代表的に知られている会社―――ヴェルヌ、ZCF、エプスタイン、セイランド、そしてラインフォルトに対して各一名ずつ優先枠を作るつもりですので、ラインフォルトグループの社員の中にも早期に「工匠」になれる人が出てくると思います。」

「あら……………」

「え……………そ、そこまでしなくてもいいわよ……………貴女達に負担をかけてしまうし……………」

エリナとセティの説明を聞いたシャロンは意外そうな表情をし、アリサは呆けた後申し訳なさそうな表情をした。

「あたし達の事は気にしなくてもいいよ。みんなが協力して豊かになって、幸せになる……それがあたし達「工匠」の目指すものだから！」

「あ、ありがとう………」

そして笑顔で答えたシャマール話を聞いたアリサは嬉しそうな表情をし

「まあ………でしたら早速『ラインフォルトグループ』と『インフィニティ』の間での商談がしたいので面会を予約させてもらっても構いませんよね？」

「フフ、わかりました。明後日ならいつでも空いていますよ。」

「さすがラインフォルトグループ会長の秘書を務めているだけあって、抜け目がないですね………」

目を丸くした後口元に笑みを浮かべ、自分達を見つめて尋ねたシャロンの話を聞いたセティとエリナは苦笑しながらシャロンの提案に答えた。

「リフィア殿下、アリサお嬢様とリン様のご婚約の件を含めてラインフォルトグループに制限されていた件が解除される件等全て、世間に公表させて頂いても構いませんよね？」

「シャロン！！」

微笑みながらリフィアを見つめて尋ねたシャロンの確認の言葉を聞いたアリサは顔を真っ赤にして怒鳴り

「ハア…………好きにしろ。既に昨日の時点でリウイ達やヴァイス達にも二人の婚約が成立した件は報告している。今更撤回するつもりはないし、第一「国」が一度交わした約束を違える訳にはいかん。…………今この時点を持って両帝国がラインフォルトグループに制限していた件全て解除する事をメンフィル帝国の次期皇帝たるメンフィル皇女リフィア・イリーナ・マーシルンの名に置いて許可する。両帝国政府の代表者には余の方から説明しておく。」

「ありがとうございます♪お蔭様で倒産の危機に陥っていたラインフォルトグループも完全に立ち直れますわ♪それでは早速、イリーナ会長に連絡させて頂きますね。————会長、シャロンです。至急報告したい事と相談したい事がございまして……………ええ、その件は勿論ですが『インフィニティ』の件もありまして————」

疲れた表情で溜息を吐いた後答えたリフィアの話を聞いて嬉しそうな表情で答え、そしてエニグマを取り出して通信を開始した。

「と言う訳でリン君、アリサちゃん！早速独占インタビューをお

願い！「クロスベルタイムズ」が二人の婚約やラインフォルトグループの件とかも全て、どの通信会社よりも早く記事にするから♪」

「ええっ!？」

「そ、そんな急に言われても……………」

そしてグレイスに尋ねられたリインは驚き、アリサは顔を真っ赤にしていた。

「アハハ…………二人とも大変だよね。」

「自分達の恋仲を世間にさらされますものね…………」

その様子をエリオットとエマは苦笑しながら見つめていた。

「…………あれ？リフィア殿下、エヴリーヌさん。どうして昨日の時点でリイン達が婚約したことを知ったのですか？」

一方ある事に気付いたロイドはリフィア達に尋ね

「もしかしてリインさん達のデートをシャロンさんみたいに覗いていたんですか？」

ティオは目を丸くして尋ねた。

「うむ。……まあ、余は来たくなかったがな。」

「エヴリーヌも。主に覗いていたのはエリゼだし。エヴリーヌ達はエリゼに無理矢理連れてこられたの。エリゼがリン達の様子を見る度にどんどん怖くなっていくから、昨日は正直生きた心地がしなかったよ……………」

尋ねられたリフィアは疲れた表情で答え、エヴリーヌはリフィアの言葉に頷いた後疲れた表情で溜息を吐き

「え”。エ、エリゼが！？」

エヴリーヌの言葉を聞いたリンは大量の冷や汗をかいて表情を引き攣らせた。するとその時！

「フフ……………昨夜と今朝は随分と楽しまれたようですね？兄様。」

なんと全身に膨大な威圧に加え、さらに背後には魔力によって発生した電撃がバチバチと迸るほどの魔力と目にも見えるほどのメラメラと燃え続ける怒気を全身に纏いながら、極上の微笑みを浮かべているエリゼがリン達に近づいて来た……………！

最終話

くミシユラムく

「うわっ……………」

「こ、怖すぎだろ、エリゼちゃん……………今のエリゼちゃんが出している威圧感、親父や叔父貴が出せる威圧感もとっくに超えているぞ……………」

「ま、まあリィンを独占し続けていたエリゼさんの気持ちを考えたら仕方ないわよ。」

「……………ですね。」

「ほえー……………エリゼ、メラメラと燃えているねー。」

極上の微笑みを浮かべるエリゼを見たロイドは大量の冷や汗をかきながら表情を引き攣らせ、ロイドと共に冷や汗をかいているランディは表情を青褪めさせて身体を震わせ、エリィは冷や汗をかきながら苦笑し、エリィの言葉を聞いたティオは表情を青褪めて身体を震わせながら頷き、キーアは首を傾げながら呟き

「ヒッ！？ガタガタブルブル……………」

「……………」

エヴリー又は悲鳴を上げた後黙り込んでいるリフィアと共に大量の冷や汗をかきながら表情を青褪めさせて身体を震わせ、周囲の人物達は恐怖や危機感によるものなのか、次々とエリゼに道を開け、エリゼはリンとアリサに近づいた。

「エ、エリゼ……………な、何でデートの覗き見なんてしたんだ…………？」

自分の正面に近づいてきたエリゼをリンは大量の冷や汗をかきながら尋ね

「フフ……………2番目の妻になるかもしれない方とのデートなのですから、1番目の妻になる女性として様子を見にきただけですよ。」

「アハハ……………あれ？エリゼ、さっきの『昨夜と今朝は随分と楽しまれたようですね？』って言ってたけど、あれはどういう意味なのかしら？」

リンの疑問に答えたエリゼの話を聞いて苦笑していたアリサはあ
る事に気付いて尋ねた。

「……………そのままだの意味ですよ？兄様の荷物に盗聴器を仕掛けてデ
ート中の会話やホテルでの出来事のほぼ全てを別の場所で聞いている

ましたから。――勿論、今朝のアリサさんの奉仕やその流れでそのまま情事をした事も知っていますよ？」

「なっ!？」

「ええっ!？」

「あらあらまああ♪（まさか今朝もしていたなんて……しかもお嬢様の方からなんて、私も予想外でしたわ♪うふふ、後で部屋に仕掛けておいたビデオでしっかりと確認しないと♪）」

エリゼの答えを聞いたリンとアリサは顔を真っ赤にして驚き、シヤロンはからかいの表情になり

「と、盗聴器………」

「そ、そこまでするなんて………」

「女の嫉妬ってこええ………」

「というか朝から一体何をやっているんですか………」

ロイドとエリィは大量の冷や汗をかいて表情を引き攣らせ、ランディは疲れた表情で身体を震わせながら呟き、ティオは蔑みの表情でリンを見つめた。

「……………」

「な、ななななっ!? あ、朝から情事って君達は何を考えているんだ!? まだ成人もしていないんだから、もっと年相応の付き合い方があるだろう!？」

「バカップル。」

「うわ…………恋人同士ってみんな、そうなのかな?」

「さすがに違うと思うが……………」

「フッ、在学中にラインフォルトグループの跡継ぎを産む気か?」

ラウラは顔を真っ赤にして固まり、マキアスは顔を真っ赤にして混乱し、フィーは呆れた表情で呟き、表情を引き攣らせて呟いたミリアムの言葉を聞いたガイウスは冷や汗をかきながら答え、ユーシスはからかいの表情でアリサを見つめ

「ちょっと、あたしが学院に勤めている間に妊娠とかマジで勘弁してよね。担任のあたしにまで責任が問われるし。」

「え、えっと…………二人とも朝から元気だね…………アハハ……………」

「そ、その…………仲が良くっていいと思いますよ…………アハハ……………」

サラは疲れた表情でアリサを見つめ、エリオットとエマは大量の冷や汗をかきながら苦笑していた。

「ねーねー、リインとアリサって朝で何をしていたのー？ホウシやジョウジって何ー？」

「キ、キア！」

「アハハ……キアにはまだ早いね。まあいつかは知るけどね。」

「もう、この娘ったら……」

可愛いらしい動作で首を傾げて呟いたキアの言葉を聞いたエリナは顔を赤らめて慌て、シャマールは冷や汗をかいて苦笑した後からかいの表情になり、シャマールの言葉を聞いたセティは呆れた表情で溜息を吐き

「フフ……お蔭様で「今後」の参考になりました。――リフィア。」

エリゼは極上の微笑みを浮かべながら答えた後リフィアに視線を向けた。

「ヒッ！？こ、こっちを見ないで……！」

「ぬおっ！？な、なんじゃ！？」

視線を向けられたリフィアの傍にいるエヴリー又は悲鳴を上げて恐怖の表情で身体を震わせ、リフィアは声を上げた後表情を青褪めながらエリゼを見つめて尋ね

「私と兄様、明日も休暇を取るから。」

「わ、わかった！余が手配しておく！だからさっさと2人で休暇を好きなだけ楽しんで来い！」

「ええ、そうさせてもらうわ。―――それじゃあ兄様、今度は私の番ですよ？フフ、腕によりをかけて、今晚の為に精力たっぷりのお弁当も作ってあるので期待しててくださいね？に・い・さ・ま・？？」

「ちょっ、エ、エリゼ！？」

焦りながら答えたりフィアの返事を聞いたエリゼはリンの腕を掴んで、その場から去って行き、ロイド達はその様子を無言で見つめていた。

「だ。大丈夫かな、リン……？」

「自業自得ですね。」

「フフ、そうね。」

「シュラバだね♪」

「畜生————！リア充野郎が————っ！！」

そして二人がいなくなるとロイドは冷や汗をかいて苦笑し、ジト目で言ったティオの言葉にエリィは微笑みながら頷き、キーアは無邪気な笑顔を浮かべ、ランディは悔しそうな表情で叫び

「リインさん、今晚エリゼさんに寝かせてもらえるのかな♪」

「朝から何てとんでもない事を口に行っているんですか、シャマーラ………」

「全くこの娘ったら………」

からかいの表情で言ったシャマーラの言葉を聞いたエリナとセティは呆れ

「エヴリーヌ！鬼^{エリゼ}は去った！鬼^{エリゼ}が戻って来ぬ内に今すぐミシユラム（戦場）から撤退だ！」

「ん！転移！」

リフィアはエヴリーヌと共に慌てた様子で転移魔術によってその場から逃げ去った。

「さーとと。せっかくミシユラムまで来たんだから、ミシユラム限定のワインでも飲んで帰らないとね。唯一人で酒を飲むのもつまらないし、ちょうどいいからあんたがあたしのお酒に付き合いなさい、"闘神の息子"。」

「美人のお姉さんとなら、喜んでお供させて頂きます！でも、できればその呼び名は止めて欲しいッス。」

サラは口元に笑みを浮かべてどこかへと向かい始め、サラの言葉に嬉しそうな表情で答えた後苦笑しながらランディはサラの後を追って行った。

「きよ、教官……朝からお酒なんて、身体に悪いですよ……」

「アハハ……明日は授業があるんだけどなあ……」

「……俺達の授業の時に酔っぱらっていないといいが。」

サラの行動を見たエマは疲れた表情で溜息を吐き、エリオットは冷や汗をかいて苦笑し、ガイウスは静かな口調で呟き

「じゃあ僕達はテーマパークに行こうよ！ユース、マキアス！おごってよ！」

「なっ！？何で僕達がそんな事をしないと駄目なんだ！？」

「断る！貴様一人で自分の金で行け！」

ミリアムの提案を聞いたマキアスとユーシスは反論したが

「えー、二人ともお金は一杯持っているんだからケチケチしなくてもいいじゃん。マキアスのお父さんはヘイムダルの知事に再就職できたし、ユーシスだってクロスベル帝国から「新しい未来を見つけるまでの生活費」として「アルバレア公爵家」にあった莫大な財産のおよそ5分の1が支払われたんだよね？おごってくれないとおごってくれるまですーっと頼み続けるよー！」

「そ、それは脅迫じゃないのか！？第一僕は父さんからそんなに貰っていないぞ！？」

「グッ………！貴様………！どこでその話を………！？というか「アイアンブリード鉄血の子供達」^{アイアンブリード}として働いていた貴様こそ、金なら持っているだろうが！？その金で遊べばいいだろうが！？」

「そ、そうだぞ！」鉄血の^{アイアンブリード}子供達「時代に貰った給料とかがあるだろうが！？」

「クレアちゃんが『まだ子供のミリアムちゃんには大金を持たせる訳にはいきません』って言ってあんまり渡してくれなかったんだよー。」

ミリアムの言葉を聞いて二人は唸りながらミリアムを睨んで指摘し、

指摘されたミリアムは頬を膨らませて答え、ユーシス達は言い争い始めた。

「それじゃアリスちゃんはアーケードにあるカフェあたりで独占インタビューに答えてもらいましょうか♪エリゼちゃんに連れて行かれたリイン君の分も含めて一杯聞かせてもらおうわね♪」

「……わたしも付き合う。興味あるし。」

「フム……ならば私も付き合おう。今後の参考になるかもしれぬしな。」

「勿論私も付き合いますわ♪事実とは異なる内容の記事にして頂いたらラインフォルトグループとしても困りますし♪」

「フィー！？ラウラ！？シャロン！？」

そして顔を真っ赤にしたアリスはグレイスやフィー、ラウラとシャロンと共にその場から去って行った。

なお、その後のリインはエリゼとデートをした後ホテルに泊まり……アリスとした情事の正確な回数を言わされた後、そのままエリゼの膨大な威圧を纏った微笑みに圧されてエリゼと情事をさせられ……自分自身が満足してもエリゼ自身が満足していなく、エリゼの情事の技術によって何度も無理矢理興奮させられた後、エリゼに

犯され……精も根も枯れ果て、翌日は朝から顔色を悪くしていた……
……更に「クロスベルタイムズ」の夕刊によってリインとアリ
サー……ラインフォルト家とシュバルツァー家の婚約や両帝国に
よる制限が解除された件を含めて全て一面に載ってクロスベル帝国
全土に広がり……その翌日には他の通信社の新聞によってゼムリア
大陸にも広がり、アリサは学院中の生徒達から祝福されたりからか
われたりして、その度に顔を真っ赤にしていた……

エピローグ

～1週間後・トリスタ・第3学生寮～

「あ……………フフ、約束通りちゃんと来ているわね……………読んだ後にそれぞれ返事を書かなくなっちゃ……………」

1週間後、寮に戻ってきたアリサは自分の部屋番号のポストの中に入っている2通の手紙……………リンとエリゼ、それぞれからの手紙を見つけて嬉しそうな表情をし、自室に向かい始めようとしたが

「あら？みんな揃って何をして……………なっ！？」

広間でサラ達……………Ⅶ組の面々が1週間前の自分とリンがデートしている様子の映像を見ている様子を見て驚き

「だって……………好きな人に……………手作りの料理を……………
……………食べて……………欲しかったんだもん……………」

映像はちょうどリンの前で真っ赤にした顔を俯かせて途切れ途切れに呟くアリサの姿であった！

「うわ～！アリサ、すっごく攻めてるね～！」

「ま、まさかあのアリサさんがここまで変わるなんて……………」

「…………どこからどう見てもバカップルとしか思えない。」

「この時点ではまだ恋人同士じゃなかったなんて、どう考えても信じられないわよね。」

「フム…………公衆の面前であれ程の告白ができる度胸は私にはないな……………」

「アハハ…………ふ、普通の人は大体そうですよ……………」

映像を見ていたミリアムは興味深そうな表情をし、白い制服姿の女性生徒は顔を真っ赤にし、フィーは呆れた表情で呟き、サラは酒を飲みながら口元をニヤニヤさせ、ラウラが呟いた言葉を聞いたエマは冷や汗をかいて苦笑しながら答え

「単に周りが見えていなかっただけではないのか？」

「アハハ…………確かにそれもあるかもね。」

「フツ、まさかあのラインフォルトがここまで積極的だとはな。」

ガイウスが呟いた言葉を聞いたエリオットは苦笑し、ユースは口元に笑みを浮かべ

「き、君達なあ…………こんな事、本人に知られでもしたら大変——

――あ。」

映像に注目してそれぞれ感想を言い合っているクラスメイト達の様子にマキアスは呆れた表情で呟いた後、真っ赤な顔で映像を見つめているアリサに気付き、マキアスの声を聞いたその場にいる全員はアリサに注目した。

「な、なななななっ！？何なのよ、その映像は！？それに何でフェリスまで一緒になって観ているのよ！？」

一方アリサは真っ赤な顔で混乱しながら声を上げてリンとデートをしている自分の様子の姿が映っている映像に向かって指を指した後白い制服姿の女子生徒――フェリスに視線を向け

「わ、私はその……シャロンさんからアリサさんの親友である私に是非観て欲しいものがあると呼ばれたので………」

視線を向けられたフェリスは顔を真っ赤にしながらチラチラと映像を観ながら答えた。

「うふふ、先週"ラインフォルトグループのとある社員"がその場において"たまたま"録った映像ですわ♪ご学友の方達にお嬢様の恋の行方を是非知って欲しく"ラインフォルトグループのとある社員"が皆さんをお呼びしたのですわ♪」

「こ、これは……………」

「ア、アリサ……………」

「ほう……………？まさかラインフォルトがここまで情熱的な性格をしているとはな。」

映像を見たマキアスは顔を真っ赤にして混乱し、フェリスは顔を真っ赤にして映像を凝視し、ガイウスは目を見開いて驚き、ラウラは顔を真っ赤にして口元に笑みを浮かべたユースと共にアリサを見つめ

「す、凄すぎるね、アリサ……………姉さんが観ている恋愛映画のシーンの一部とそっくりだよ……………アハハ……………」

「ま、まさに相思相愛ですよね……………アハハ……………」

エリオットとエマは大量の冷や汗をかいながらアリサを見つめ

「バカップル極まれり……………だね。」

「もしかしてクレアちゃんも『黄金の戦王』と似たような事をしていいるのかな？」

フィーは呆れた表情で呟き、ミリアムは興味深そうな表情で映像を

見つめながら呟き

「フフ、それどころかもっと凄い事をしているわよ♪……というか観ていて気になったんだけど、ホラーコースターやゴンドラの中の出来事とかどうやって録ったのよ……まさかとは思うけど"結社"の技術とかで作られた特製のビデオとかじゃないでしょうね？」

「うふふ、それは企業秘密ですわ♪」

からかいの表情で言った後ある事に気付いて呆れた表情で自分を見つめて尋ねるサラの疑問を聞いたシャロンは笑顔を浮かべて答えを濁した。

「キャアアアアアアア————ッ！？お願いだから早くその映像を消————し————て————」
「——ッ！！！」

一方リインと深い口付けを交わしている自分の映像を見たアリサは真っ赤にした顔で悲鳴を上げた！

～同時刻・リベール王国・ロレント郊外・メンフィル大使館～

「——失礼します。リウイ様、ラインフォルトグループ会長の秘

書の名前でリウイ様当てに荷物が届いておりますが……」

同じ頃荷物を持ったペテレーネがリウイとイリーナがいる執務室に入った。

「ラインフォルトグループが俺宛てにだと？……待て、確かラインフォルトグループ会長の秘書は元“執行者”ではなかったか？」

「えっと確かシャロン・クルーガーという名前の方でしたよね……？」

「はい。勿論予め検査をしました但毒物や爆発物の反応はなく、荷物と一緒に届いてきた手紙には『ラインフォルト家とシュバルツァー家が婚約した証拠を念の為に送付させて頂きました』……と書いてあるのですが……」

リウイとイリーナに聞かれたペテレーネは戸惑いの表情で答えた。

「まあ……私達が解除した制限やクロスベル帝国との取引を撤回されない為ですかね？」

「その件は通信各社によってゼムリア大陸全土に知れ渡っているというのに、そこまでするか……？ハア……まあいい、とりあえず中を見ればわかるだろう。――ペテレーネ。」

「はい、リウイ様。」

ペテレーネの話を聞いたイリーナは目を丸くした後不思議そうな表

情をし、リウイは呆れた表情で溜息を吐いた後ペテレーネに視線を向け、視線を向けられたペテレーネは荷物の中を開けてデータディスクを取り出した。

「映像データか。――再生してくれ。」

「はい。」

そしてペテレーネはデータディスクを映像をみせる装置に入れ、リモコンについている再生ボタンを押そうとしたが

「あ……す、すみません……誤って早送りのボタンを押してしまいました。」

誤って早送りのボタンを押してしまい、その事に気付いたペテレーネは申し訳なさそうな表情でリウイ達に謝罪し

「別に気にしないでいい。早送りした場面から再生してくれ。」

「はい。」

リウイの指示を聞いた後そのまま再生ボタンを押した。

「リイン……ん……好き……ちゅる……大好き……
……ちゅ……愛している……！……ん……ちゅ……
ちゅる……！……」

するとアリサとリインが深い口付けを交わしている瞬間の映像が映った！

「まあ……………」

「あわわわわわわっ!？」

「……………」

衝撃的な映像を見たイリーナは頬を赤らめて目を丸くし、ペテレーネは顔を真っ赤にして混乱し、リウイは石化したかのように固まった！

「す、すみません、リウイ様っ!!!す、すぐに消します!!!」

そして我に返ったペテレーネは慌てた様子でリモコンのボタンを押して映像を消した。

「え、えっと……………た、確かに今の映像を見たら二人が婚約したことがわかりますね……………」

映像が消えるとイリーナが冷や汗をかいて苦笑しながら呟き

「リ、リウイ様……………どうでしょうか、この映像が入ったデータは……………」

ペテレーネは顔を赤らめながらリウイを見つめて尋ね

「…………同じ婚約者であるエリゼに渡しておけ。」

尋ねられたリウイは頭痛を抑えるかのように片手で頭を押さえながら疲れた表情で指示をした。

く同時刻・オルキスタワーく

「リイン…………ん…………好き…………ちゅる…………大好き…………
…………ちゅ…………愛している…………！…………ん…………ちゅ…………
ちゅる……………！」

「あらあらまあまあ♪若いっていいですね♪」

「ガッハハハハハッ！この様子なら破局はありえんだろうな！」

同じ頃オルキスタワーでとアリサとリインが深い口付けを交わしている瞬間の映像を見ていたルイーネは微笑み、ギュランドロスは豪快に笑い

「うふっ♪リインも隅におけないわね♪」

「あの二人は御愁傷様としか言いようがないですよねえ……………」

エルファティシアはからかいの表情になり、アルは苦笑し

「フッ、情熱的なキスだがまだまだ技術が足りんな。もっと舌をか
らめる必要がある上、リインもリインだ。既にエリゼとしている経
験があるのだから、例え向こうがしてきても男としてリードしてや
るべきだろうに。」

「ヴァイス様……………それ以外に言う事はないのですか……………」

「何を呑気に映像の評価をしているんですか！？それにギュランド
ロス様とルイーネ様もこ、こんな破廉恥な映像で呑気に笑わないで
下さい！」

静かな笑みを浮かべて呟いたヴァイスの言葉を聞いたりセルは呆れ
た表情で溜息を吐き、エルミナは顔を真っ赤にして怒鳴った。

～同時刻・特務支援課～

「リイン……………ん……………好き……………ちゅる……………大好き……………
……………ちゅ……………愛している……………！……………ん……………ちゅ……………
ちゅる……………！……………」

「こ、これは……………」

同じ頃特務支援課のビルでアリサとリィンが深い口付けを交わしている瞬間の映像を見ていたロイドは大量の冷や汗をかきながら表情を引き攣らせ

「す、凄すぎるわね、アリサさん……手料理をリィンに食べさせた時や他の人達もいるにも関わらず告白した事も凄いなと思ったけど、まさかここまでするなんて……………」

「情熱的です……………」

「わあゝ、二人ともすっごくラブラブだね♪」

エリィは冷や汗をかきながら苦笑し、ティオは頬を赤らめ、キーアは無邪気な笑顔を浮かべ

「というかホラーコースターやゴンドラの中とかどうやって録画したんだろうね？」

「もしかして遠方でも近くで見えるように調整して録画できる新型のビデオでしょうか？」

「いえ、ラインフォルトグループが開発した試作品のビデオかもしれませんよ？これ程の新機能を持ったビデオはまだ市場に出ていませんし……………」

首を傾げて呟いたシャマ―ラの言葉をきっかけにエリナとセティは真剣な表情で話し合い始め

「あのなあ……………今の映像を見て他に思う所はなかったのか……………」

シャマ―ラ達の会話を聞いたロイドは呆れた表情で指摘し

「畜生――……………ッ！リア充野郎が――……………」

……………ッ！！」

ランディは悔しそうな表情で声を上げた！

こうして……………リンとのお見合いは互いが相思相愛との仲になって、婚約は成立し……………その事によって倒産の危機に陥っていたラインフォルトグループは完全に立ち直った。3人の仲も良好で一ヶ月に二回は必ず会って一回目はリンと二人っきりのデートをし……………二回目はエリゼも加えて三人でデートをし……………それぞれの夜は必ず愛し合った……………そして数年後3人は家族や多くの仲間達や知り合い達から祝福されながら結婚式を挙げ、幸せな家庭を築いた……………

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
http://www.akatsuki-novels.com/stories/index/novel_id~17946

英雄伝説～光と闇の軌跡～番外編 アリサのお見合い篇
2016年09月07日 08時04分発行